
パパとの関係

華陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パパとの関係

【著者名】

華陽

N5259M

【あらすじ】

近江家の長男として、何不自由なく暮らしてきた僕。

そんな僕に青天の霹靂。突然養子に出されてしまう。

新しい父親の高鳥京介は大財閥のくせして、まったく手伝いを雇わない。

そんなこんなで、家事と勉強を両立しなくちゃいけなくなってしまった。

時々突然激しいスキンシップをしてくる京介にいつも悩まされる僕の明るく、そしてちょっと切ない物語。

かわいい鴻と鬼畜な秀のお話も同時進行です。
学園的な要素も多分に織り込んでいく予定です。

人物紹介（前書き）

はじめましての方も、前作からお読みいただいている方も、こんにちちは。

華陽です。

今回もどうぞよろしくお願いします。

人物紹介

近江偉：大財閥近江家の長男。小柄で目が大きい典型的なかわいいタイプ。

ある日、突然父親から、ライバル財閥高鳥家へ養子に出されてしまう。

新しく父親となつた高鳥京介は毎日毎日過剰なスキンシップをしてくる。

軽く貞操の危機。元気いっぱい明るい少年だけど、本当は・・・。

私立東稜学園一年生。

高鳥京介：大財閥高取家の若き当主。

質素儉約を常として、家には手伝いを一切置かない。

そのため、家事全般に精通している。

現在は、偉に家事を教えている。

東稜学園の理事長も兼任している。

人物紹介（後書き）

主要人物以外は、いつもどおり少しづつ書いていきますので、よろしくお願いします。

act・1 青天の霹靂（前書き）

今回は、プロローグみたいなものです。

まあ、軽く流す感じでお読みいただければ幸いです。

穏やかな休日の午後。

近江邸では、ひとつのかび声が走った。

「父さん！俺が養子入りってどういうことなの！」

「つるさこぞ偉。もうこれは決定事項なんだ。明日はちょうど日曜日だから移動の手筈は整えておいた。明日には高鳥邸に向かうんだぞ。」

「そんな、説明だけでもしてよ。」

「そうですよ、父さん。これは家の問題にもなるんですよ。」「こういったのは、弟の近江景だ。

俺と違つて、成績優秀。長身で今時のイケメンってやつ。
くそー。俺だつてもうちょっと身長が高ければ・・・。

「それに、その養子先が高鳥家だなんて。」

「高鳥は名門の一族。問題はないだろ？。」

「それでも、最近はライバル同士ではないですか。」

「先ほどもいつたが、これは決定事項だ。私はこれからドイツに取引先の相手との交渉に行かなければならぬ。この話はこれで終わりだ。」

そういうと父さんはすばやく部屋を出て行ってしまった。

「なんなんだよー。いきなり。」

思わず床にヘタッと座り込んでしまう。

「兄さん・・・。大丈夫だよ。せつと父さんも何か考えがあつて・・・。」

「その考えが怖いんだよ。」

は〜つとため息をつくと。

「それにしても、何で兄さんなんだろうね。普通長男はそういうのと無関係のはずなのに。」

そう、確かにそうなんだよ。

普通、跡継ぎの長男はこいつのこと無関係だろ。

もしかして、できの悪い長男より、優秀な景の方がいってことなのか？

いやいやだめだ。このことをこれ以上考えてるとビビりん気持ちが落ち込んでくる。

気を取り直して、

「なあ景。その高鳥家の今の当主ってどんなやつなんだ？」

「ああ、若くして高鳥家の執政を一手に纏め上げる俊才らしいよ。ほら、この前父さんに連れられて行つたパーティで最初に話してた人。

「ああ、あの人か。ん？あれ、あの人二十歳位じゃなかつたか？」

「うん、二十四歳だったと思うけど。」

「え、じゃあ明らかに義理の父つて年じやないじゃん。むしろ兄貴つて感じ？」

「もしかしたら、その才能を少しでも見立てつてことじやないかな？」

「景、お前案外失礼なやつだな。」

「いや、少しでも兄さんを励ましたくつて。それに・・・」

そういうと、少ししゃがんで（つ、俺がもうチョイ高ければ）耳元で

「なんだか今回のこと、僕にも納得いかないことがあるんだ。少し僕のほうで調べてみるから、兄さんも気をつけよ。」

「何かつて何だよ。」

「さあ、杞憂ならいいんだけど。」

なんだか、いきなり脅されたな～。

あ。

「そういや、俺って苗字どうなんだろ？」

言つた瞬間景はガクツとしていた。

「どうしたんだ？」

「いや、こんな重要な話してたのにいきなりそんなことこつなんて、

兄さんらしいと思つて。」

俺はちよつとムカツとして、

「つるさいな、苗字も十分重要なことだ。テストとかでどっち書くんだよ。」

そういうたらくすつと、景のやつ笑つて

「本当に兄さんはかわいいな。」

なんていいやがつた。

「おい、いつも言つてんだろ。男にかわいいは褒め言葉じゃないんだよ。」

「じめんじめん。とりあえず近江姓のままでいいんじゃないかな。」

「偉様、景様。夕食の時間です。」

「ああ、今行く。」

「兄さん。」

「ん? どうした。」

「氣をつけてね。」

この言い方がどこか俺の心に残り続け、次の日俺は高鳥家へ向かつた。

act・2 高鳥家

「あんのくそ親父～。」

俺は、今高鳥の家の前にいる。

そして、こんな暴言を吐いているのはわけがある。

それは、

「『邸』っていうから、もっとわかりやすいもんだと思つだひ～。」

そう、俺は今朝、せつかくだから歩いて行こうと思いつて、ここまで歩いてきたのだが、まったく邸と呼べるみつた建物はなくて、迷いに迷つたのである。

まあ、それでも周りの家に比べれば浮いているくらいだけど。

それにしても、どうしようかな。

着いたのはいいんだけど、なんとなく緊張する。

新しい父さん。これから一緒に暮らして行くんだからな。

いい人だといいな。

まあ、有能な人らしいから、きっと大丈夫だ（根拠なし）。

そして決心が固まりインター「フォンを押そうとした瞬間。

「家に何か用か?」

「うひやあ。」

突然後ろから声をかけられ驚きのあまり変な声を出してしまった。

・・・恥ずかしい。

「ああ、近江のとこの子か。」

後ろを見ると、二つのスーパーの袋を持った人がいた。

その顔を見た瞬間僕はボーッとしてしまった。

すげーかつこいい。

実は俺、今まで景以上にかつこいいやついないと思ってたんだけど。

「何をボーッとしてるんだ。少し手伝ってくれ。」

そういうと、スーパーの袋を俺に渡してきた。

その後、家に入り、袋の中身を冷蔵庫に入れ、この人について書斎に入った。

「自己紹介がまだだつたな。俺は高鳥京介。たかとりきょうすけ今日からお前の父親だ。」

「

それでも、まだボートとしてたので

「ん？ デリしたんだ。」

かつこいい、とはいえず、

「あ、えーと。今日からお世話をなる近江偉です。よろしくお願ひします。」

最大限に礼儀正しく言った。

「うん、よろしくな。それと、父さんとか呼ばれるのはさすがに嫌だから、京介さんとかでいいぞ。」

「うん、わかった。それにしても、さつきからまつたく家政婦さんとか見当たらないんだけど。」

「俺は、一切そういうのは置かないから。基本家事はお前の仕事だから。」

俺は、頭を鈍器で殴られたような気がした。

「はーー！俺そういうのまったくできないんだけど。」

「大丈夫だ。一つ一つ教えていってやる。」

「そんな、絶対無理だよー。」

そういつた瞬間、今までニコニコしていた京介の顔から笑顔が消えた。

「無理じゃない。俺がやらねばいいってんだ。」

その顔がちょっと怖くて俺はコクンとつなぎにしてしまった。

「わかればよし。」

そうこうして、俺の頭をなでてきた。

もしかしたら、俺は厄介なのにつかまつたのかもしれない。

act・3 家事

それから、俺は京介に毎日行つべき家事を叩き込まれた。

洗濯、掃除、風呂焚き etc。

あらかたやり方は教えられ、残るは料理だけとなつたが・・・。

「本当に料理だけは無理なんだってば～。」

弱音を吐いていたのだった。

なんてつたつて、自慢はできないが料理なんて学校の実習でさえ食べる側に回る（つまりサボってる）んだ。

「大丈夫だ。今までだつて何とかこなしてきたじゃないか。」

「うーん、とうあえずさつき京介が買つてきた野菜を切つていいくことにして。」

「本当にお前家事やつたことないんだな。」

その切つた野菜のあまりのお粗末せに、ヒヒヒヒ京介がため息をついた。

「へ、ひるといな。大体なんで京介さんはできんだよ。」

そういうて少し集中を欠いた瞬間。

「つ痛。」

やってしまった。

やつべつやつてしまつた。

「おい、大丈夫か？指見せてみる。」

うわ、わつわまちよつと遠くにいたの。

案外、面倒見はいいんだよな。

と想つていたら、

クチコツと口にふくまれた。

「な、何じてんだよ〜！」

「何つて、消毒だよ。」

「消毒つて、いつこのひで自分でするもんだ。」

そうつて指を取り返したが、また血が出てきました。

「やばい」

やつべつ口にふくんだら

「間接キス。」

なんて一言一言しながら言つてきやがつた。

「ち、違つ。これは、あの……」

「気にするな。親子だろ。それに、」

取り出したのは絆創膏だった。

「あるんなら最初から出してやめへ。」

やつして、傷口をとめてくれた。

「仕方ない。料理は俺がやつてやるか。」

「え、本当。」

「ああ、毎日やつてやる。だなどひとつだけ俺の願いを聞いてくれるか?」

「うん、聞く聞く。」

痛い思いはしたが、結果よしだ。

「じゃあ、今晚俺と一緒に寝よ。」

「なんだ、そんなことか。別にいいよ。」

そういったら、京介はまじまじと俺を見て、

「案外素直なんだな。」

「何が？」

「いや、少し抵抗されるかな、と。」

「別に、家でも景とかとよく一緒に寝てたし。」

そうこうたら、少し京介はムツとして

「景？」

「ああ、俺の弟。」

「せうか、それじゃあ今日は一緒に寝よつ。」

そういうて、黙々と料理をはじめてしまった。

あれ？なんか怒ってる？

その怒ってる理由は分かんなかつたけど、その後作つてもらつた料理はすくへおいしかつたんだ。

act・4 こころなじむ（前書き）

更新が早くでないと、うれしい限りです。

皆さんにも楽しんでいただけたら幸いです。

act・4 こころいろな「」

「飯を食べて、風呂に入つて、京介の部屋に入る頃、俺はさつとき京介がちょっと怒っていたことなんか忘れてしまつていた。

「お先に失礼しました。」

「うううううう、まだ少し頭がぬれてるだろ。」

そういうて、俺が肩にかけていたタオルを取り、頭をうしろし拭いてくれた。

「へへへー。ありがとうございます。」

そういうつた瞬間、京介はちょっとまほを向いてしまつた。

「何へ。なんか怒らせたへ?」

そういうつて京介の肩にもたれかかると、

「お前、何かわつと違つてハイだな。」

「うそ、風呂入るとこつもこんな感じへ。」

そうして、部屋を見回すと

「京介さんの部屋つて結構本とか置いてあんだねへ。」

よく見ると、経営学とかいろいろ置いてあった。

「ああ、読みたい本があつたら貸してやるや。」

「いいよ～。俺が読んでも分かんなさうなやつばっかだもん。」

そうして、ベットに飛び込んだ。

「うわ～。結構ふかふか～。俺さ～、大人つて固いベットの方が寝やすいのかな～って思つてたんだけど。」

「いや、俺はやっぱ柔らかい方がいいと思つが。」

「やうなの～。じゃあ、俺も大きくなつても柔らかいベットのままでよ～。」

ベットでソリソリしてみると、

「お前つて変なやつだな。」

「な、何だよこきなり。」

たゞがにっこり変なやつとはなーだらけ。

「いや、普通、思春期には一緒に寝るとか結構嫌なもんだろ。」

「あ～、俺つてさ、昔から母さんに嫌われるみたいでさ、小さい頃いつも一人で寝かされてたんだ～。だからさ、誰かと一緒に寝る」とつて結構抵抗ないんだ～。」

「すまないな。」

「え？」

「嫌な事を思い出させてしまったか？」

「別に、昔は確かにわびしかったけど、もつ狂の」とだし、俺、昔のことは気にしない主義なんだ。」

「僕は強いな。」

やつこつて頭をなでてきた。

「も～、子供扱いすんなよな～。」

何でだらり、京介にこつこつ風にされるのは嫌じやない。むしろ・。
・。

「やついえば、京介さんは、何と一緒に寝たかったの？」

そういうと、京介は少し黙つてから、

「昔見たテレビで、家族で一緒に寝ていた姿が映つていて、それが本当に幸せそうだったんだ。それに憧れたから。」

そういうわけで、俺は思わず笑ってしまった。

「何が可笑しい？」

少しムツとされて言われて、

「ああ、『めんなさい』なんだか京介さんついてはかっこいい、庶民的なこと言つただな～って。」

「もういい、寝るわ。」

何か、照れた京介さんつてかわいにな～、なんて口ひは出せないけどね。

ベットに入つてみると京介さんはこきなり俺を抱きしめてきた。

「何だよ～。苦しそよ～。」

「いや、抱き枕にひりひりいがなつて。」

「仕方ないな。まあ京介さんのお願いだし、今日は我慢するよ。」

改めて、近くで京介を見ると本当に美形だ。

そのことで少しちゃンとしてしまった。

「おやすみ、京介さん。」

「ああ、おやすみ。」

どうやら、今日まことに仕事しかつたので、俺はすぐに脱ぎに落ちてしまつた。

「ふわ～。」

あれ、なんだかいつもの場所と違ひよつな・・・。

つてそ、昨日養子入りした京介の家に来たんだっけ。

うわ、横に超美形の人(京介)が寝ている。

本当に京介ってかっこいいよな～。

あれ、よく見てみると髪の色、黒じやないよつな・・・。

氣になつて触つてみよひと思ひ手を伸ばすと、

「どうかしたか?」

「うわ～。京介さん、起きてたの?」

「ああ、襲われそうになつたからな。」

「ち、ちが。そ、じやなくつて、京介さんの髪、色が黒じやないな
うつて。」

「ああ、少し茶がかつているな。」

「もしかして染めてるの?」

「いや、元からだ。」

「あ、そりなんだ……。」

「それより、お前、時間は大丈夫か?」

「へ? どういふこと?」

「今日は月曜日だね。」

・・・・・あー!

そうだった、今日はもう学校の日。

時間は、7:30を超えたところ。

「やばい、急がないと。」

急いでベットから降りようとしたら、なにやらクスクス笑う声が、

「お前って、あわてる姿もかわいいな。」

「な、そんな場合じゃない。急がないと遅刻。」

「まあ、あわてるな。始業は8:20だぞ。」

せつ、だから一時間前に出でおかないといけないのに。

と思つてると、京介は窓の前行き盛大にカーテンを開けた。

「うわ、眩しい。」

「ほり見てみる。」

「ん？」

なにやら坂の下のほう（ここは少し小高い丘の場所なのだ）に見慣れた学校が。

「うそ、ここって学校の近くなの！」

横からは～っとため息が漏れた。

「お前は、昨日どの駅で降りたんだか・・・。」

「仕方ないだろ。だつて新しい家に行くのに緊張してたし、ここ探すのに必死だつたし。」

「はいはい、まあ近いとはいえ、そろそろ急がないと。」

そうして、階下に行き、京介の朝食作りを手伝つて朝食にした。

「でもさー、俺の学校がたまたま京介さんの家の近くなんですよ」と偶然だね。」

言つた瞬間盛大に笑われた。

「ああそつか、お前は知らなかつたのか。俺はあの学校の理事も務めてるんだよ。だから近いのは当たり前。」

「えへ、やうだつたの。」

「まあ、まだ入学したてのお前は知らなくても当然だけどな。」

「そうして、京介は、

「あと、言い忘れてたが、俺は、平田は忙しい」とがほとんじだ。
朝は用意してやれるが、夕食はその場では用意してやれない。だから作り置いたのをあつためて食べる。」

「えへ、京介さん帰り遅いの～。」

「なんだ、寂しいのか？」

ムカ、

「別にそんなことないもん。」

「わかつたわかつた。なるべく早く帰れるようにしますよ。あと、
昨日教えた家事はきつちつとやって置くよ。」

「わかつた。」

そつして、俺は半ばゆづくつとした朝を送り、登校していくのだった。

act・6 学校生活

結局、朝ゆっくりすぎたせいで、学校には走ってくの1Jになってしまった。

IJで、IJの学校の説明をしておIJ。

IJ、とうりょうがくえん 東稜学園は半寮制の高校だ。

一応中高一貫校だが、高校からの外部生と内部生の割合は半々くらいだ。

俺は、高校からの外部生。

一応寮もあるってことで、結構広い範囲から生徒が集まる。

まあ、大体こんな感じの学校だ。

「お~い偉。相変わらず遅刻ぎりぎりの登校だな~。」

「つるさこーなシユン、寮生と違つてこつけは遠いんだよ。（まあ、実際は近くなつたけどね）」

IJのシユンところのは、同じクラスの相沢俊一。
あいざわしゅんいち

俺の高校最初の友達だ。

ちなみに、寮生。

「お、じゅあ僕も一緒に寮生活するか？」ひみつの相方になってしまった。

「

「こ～や、遠慮しないべ。」

「うわ

シヨンとは、本当に昔からの友達みたいに仲良くなつた。

それと二つのも、初登校の日。

外部生ということで、すぐ心細かつた俺に、気をへに声をかけてくれたのがシヨンだったんだ。

それから一週間、ぐらこま、本当にシヨンにべったりだった気がする。

「僕ってさ、結局部活決めたのか？」

「ああ、バスケ部に入ろうと思つてんだけだ。」

「お前、それってすっづ～邪な考え方だろ。」

「な、邪な考え方って何だよ。」

「身長。

「う、

「団星か。」

「うるさいな、バスケの選手ってみんな背が高いじゃん。すっげー憧れるんだよ。てゆうか、理由はそれだけじゃなくて、俺、一応中学でもバスケ部だったんだよ。」

まあ、あんまりうまくはなかつたけど。

「偉つてさ、足すつげー速いんだからさ、俺と一緒に陸上部はいんね~。」

「え、ああ。なんかそれも面白そうだな。」

「だらだら、せつかくだし心機一転つて感じでいいと思つぜ。それに、陸上部の先輩たちすつげーいい人たちだし。」

「うん、じゃあ、早速仮入部届けだしてくるよ。」

そうして、瞬く間に授業は終わつて放課後。

「偉~。体育着持つてきてるか?」

「うん、持つてきてるけど。」

「先輩たちがや、早速来てもうこいつて言つてるからね。」

「うんわかった。」

そうして着替えて陸上部の練習場に着くと、長身のさわやかそな人と、なんだか精悍な顔つきの人人がいた。

「あ、真中先輩、沖下先輩。こんちはー。こいつがさつを言つたや

つです～。」

「はじめまして、近江偉です。よろしくお願ひします。」

「ああ、君が。僕は陸上部主將、まなかはやと真中隼人。よろしくね。」

「俺は陸上部副將、おきしたかずや沖下和也。」

「ああ、ここつのは無愛想はデフォルメだから気にしなくていいよ。
でもすっげ～にやつだから。」

「無愛想は余計だ。」

「それにしても、本当にシゴンの通りの子だね～。」

「シゴン、俺のことなんてこいつたんですか？」

「うそ、すいにかわいいやつがいるんだってこいつも血通してたよ。
「シゴン～。男にかわいにはほめ言葉じやなにこいつてこいつも言つて
るだろ～。」

「ああ、悪い悪い、僕お許しあ～。」

「ああ、まつたく。」

「え～と、ほかの方々は？」「

「え～と、ほかの方々は？」

「ほかの方々ってゆうか・・・」

「これで全部だ。」

「えへ。じゃあ3人なんですか?」

「そう、今陸上はこの学校では人気はない。でもきっと僕がこの部に栄光を。」

真中先輩は決意の表情をして言つと、

「あいつの、あれは毎年だから気にするな。」

沖下先輩の注釈が入つた。

「そんなことより、偉君。早速君に少し走つてもらいたいんだけど。」

「ああ、わかりました。」

わつき、アッショウに履き替えているから、いつでも準備万端だ。

スタートラインに着く。

さあ、心を落ち着けよ。

「よーい、ドン!」

走る走る。

無心に、ただ走り続ける。

「ゴールに着くと真中先輩は驚いた表情をしていた。

「50メートル5・9。陸上とかには入ってなかつたんだよね？」

「クンとつなづくと」

「す」「こ、これなら文句なしだ。一緒にインハイ目指してがんばつていこう。」

「はい、よろしくお願ひします。」

その後、通常の練習メニューを聞いて、少し体を動かし早めに切り上げた。

教室に戻ると、

「ほりなー、言つたとおり楽しかつただろー。」

「うん、先輩たちもすごいいい人だつた。真中先輩は面白いし、沖下先輩は意外にやさしいし。」

「よしよし、じゃあ明日は入部だな。」

「あ、じゃあ早速入部届けの書類、事務室から取つてくれる。シュンはここで着替えて待つて。」

「アツ解。」

急いで一階の事務室へ急行しようとしたが、降りる瞬間人とぶつかってしまった。

「あ、ごめん、急いでたから。大丈夫？」

ちよつと走っていたので、素直に謝った。

「ああ、平気。君こそ大丈夫。」

「ああ、俺は大丈夫。」

「お~い秀~。」

「あ、ごめん。呼んでるから。」

そうして、彼も声の主のほうに小走りに駆けていった。

「本当にごめんな~。」

「気にしないで~。」

いいやつだな~と思いつつ、俺はまた事務室へと向かった。

書類を取つた後、シュンと一緒に帰つた。

この秀と声の主がこの後、大きな影響を与える事このどき俺は予想していなかつた。

act・7 いない

「あ～疲れた～。」

今日はいろいろあつたな～。

陸上部も楽しそうだし、学校も近くなつたしさ～。

「たつだいま～。」

あれ？

あ、そうか。京介遅いって言つてたつけ・・・。

家の中は、しんと静まり返つてゐる。（鍵は前日渡されてゐるの
だ）

なんだか、え～と、寂しい。

よく考えたら、いつも景とかが近くにいてくれたから、家で一
人つてあんましないんだよな～。

やばい、改めて直面するとさうに寂しい。

そうだ、とりあえず京介が作ってくれたご飯でも食べて気持ちを落
ち着けよう。

そう思つて冷蔵庫を開け、作り置きを温めて一人でご飯を食べてい

るじ、

「うへ。」

やば、ちゅうと寂しさで涙が。

てこうか、『れじゅウサギじゅん。

あ～、俺つてこんなに寂しがりやだったんだ～、なんて考えていひ
ちじんどん涙が、

「うへ、京介さん。」

思わず呼んでしまつと、

「呼んだか？」

「うわ～。」

後ろに京介がいた。

「な、なんで？遅くなるつて。」

「ああ、朝のお前を見てたら心配になつてな。

そして、京介さんは俺をじつと見ると、

「なんだ、泣いてたのか。」

意地悪そうに笑つてそうこうした。

「な、泣いてなんかないもん。ちょっと寂しかつただけだよ。」

「はいはい、それにしても困ったな。これじゃあ、おひおちゅうく
り仕事もできん。」

あ、やばい、俺京介に迷惑かける。

「じめんなさい。」

「別に気にするな。お前に頼られてると思つて、悪い気もしないし
な。」

「で、でも、俺のせいで仕事とかに影響が出たり……」

俺は思わずトトを向いて、

「……いやだよ。」

そういうと、京介は俺の頭をクシャクシャとなでて、

「それじゃあ、犬でも飼つか?」

「え?」

「ただし、お前が責任を持つて世話をするとこいつならな。」

「俺が犬を好きつい?」

「ああ、知ってる。近江の家の番犬と仲良く遊んでただろ。」

「え、何でそのこと?」

「前に」、一度近江の家に行つたときまたま見つけてな。」

そう、家に景がいなときは、たいてい犬と一緒に遊んでたのだ。

散歩とかもよくしてたし、俺つて犬大好きなんだよな。

「あの時、あんまりにも楽しそうにお前が遊んでるのを見て、ずつと覚えてたんだ。」

そして、

「ただし、お前が本当に責任を持てるといつなりな。」

「うん、大丈夫。俺本当に犬好きだもん。」

「じゃあ、今度見に行こう。それまでは、寂しくても泣くんじゃな
いぞ。」

「な、だから泣いてなんか。」

「はいはい、わかったわかった。それより、家事の方はどうでした?」

あ。

「まつたく、じゃあ飯食つたら、手分けしてやつていくか。」

「うん。あ、それとね、俺陸上部入ったんだ。」

「へ～。偉は足速いのか？」

「うん、今日先輩が褒めてくれた。」

言った瞬間少し京介の表情が強張ったような気がしたが、

「そうか、よかつたな。」

次の瞬間にはもう戻っていた。

「それじゃあ、その冷凍モンだけじゃ、足りないだろ。これから作つてやるからちょっと待つてろ。」

「え、わ～い。京介さんありがと～。」

そう、本当に足りなかつたのだ。

「京介さんつて本当に面倒見がいいよな。」

そういうたら、

「バカ、お前だからだよ。」

「え？」

え、え。何、なんか、京介さん真剣な目。

え、これって？

そうしたら、次の瞬間、

「できの悪い子ほどかわいいつてな。」

ムカ～。

「何だよそれ、俺は悪くなんかない。」

「一人で寂しくて俺の名前を呼んでもか？」

「あ、だからそれは……。」

次を言おうとしたら、突然抱きすくめられ

「俺以外の名前なんか呼びながら泣くんじゃないぞ。」

「ビ、ビリこいつ」と?

「うう」と、京介は、はつとため息をついて小声で
「本当に箱入り息子だな。まあいい、これから教えていつてやるからな。」

と言った。

俺はうまく聞き取れず、

「なんか言った？」

「別に。それじゃあ、今から作ってくれるから待つてろよ。」

そういうって俺から放れてキッキンに向かっていった。

「何なんだよ～。」

まったく、親子ってこんなスキンシップを取るもんなのか～？

それにしては、ちょっとビックリしたって言うか・・・。

結局、そのことが気になつて、料理もうまく味わえなかつた偉でした。

act・8 気になれる

「飯を食べて、家事をやり、風呂に入った後、俺はさつきのスキンシップが気になって京介の部屋に向かった。

でも、なんて聞こう？

ていうか、普通にあることなんじゃないかな？

でも気になる……。

そつやつて、部屋の前でうわひしてたり、

「おこ、偉、どうかしたか？」

部屋の中でも、気がかりてしまつたみたいだ。

そして部屋の中に入ると、

「どうした？ 一人で寝るのが怖いのか？」

「な、そんなわけないだろ。」

くつねー、からかいやがって。

「じゃあ、何か用か？」

「えつと。」

そつこわれてしまつと、なんだか直接は聞けないよ。

俺は少し話題を切り替えて、

「京介さんって勉強熱心なんだね。」

と、話題をやらした。

事実、今京介は経営についての本を読んでいた。

「ああ、日々努力をしないと、世の中においでいかれてしまうからな。」

や、やばい。めり込んじゃつよい。

外見だけじゃなくって、中身もかつこいい人が、本当にかつこいいんだな。

あ、それじゃあ、

「『めんなさい、邪魔しちやつた？』

「別に構わない。勉強だけじゃなく親子のスキンシップも重要だからな。」

ああ、やっぱつせつしきのも、スキンシップなのか。

なんだか、過度な気もしたけど別にそつじやないのか。

そう思つたら、少しがつかりした自分がいて、少し驚いた。

そつして、ふと机の端っこを見ると、なんだかひょいと厚めの本の
よつなものが置いてあった。

「なにこれ？」

「あ、それは。」

「へ、珍しい。ちょっと京介さんがあせつてる。」

なんだか新鮮で、思わずからかいたくなつてしまつた。

やつしてその見開きを見ると、

「え？ お見合いで写真？」

すぐに京介さんに取られてしまつたが、それは確かにお見合いで写真
だった。

「そ、そつだよな。京介さんも大財閥の当主だし、24歳だし、そ
ろそろ結婚なんだよな・・・。」

言つていて、少し心がすきつとした。

何でだらり、おかしいな。

「うひの母が勝手に持つてきたんだ。俺には関係ない。」

「でもや、もし結婚とかなつたら、俺つてさ・・・。」

言いたくないが、こゝはまつきひとつ

「……邪魔だよね。」

やば、なんだか最近涙腺がゆるいみたいだ。

涙が溢れてとまらない。

「おーおー、泣くな。邪魔なんてことあるわけないだろ。」

「でもむ、実際そうじゃん。」

「いいで、前に思つていた大きな疑問がまた出てきた。」

「じゃあ、何で俺の養子入りなんて受けたの？」

「それは……。」

答えてくれない、もしかして。

「親父が圧力かなんかかけたの？」

あの親父ならやりかねない。

今急上昇中の高鳥家だつて、古參の近江家にはまだかなわない。

それに親父だつたら、急上昇中の高鳥と手を結ぶ方法なら、手段を選ばない気がする。

でも、そうしたら、

「そんなんじゃない。」

「じゃあ、何で？」

「それは・・・。」

「何で答えてくれなーのア。俺だつて知る権利はあるはずでしょ。」

そういうとも京介は答えてくれない。

何でだよ、どうして。

いつもの京介をさじやないみたいだ。

俺は、部屋を飛び出し、自分の部屋に走った。

「うぐ、何でだよ。」

少しして、部屋の扉を叩く音がなるまでも俺はひとしきり泣いた。

act・9 仲直り 恋の予感

「偉、入つてもいいか?」

「・・・今は話したくない。」

「お願ひだ、偉。」

「う、逃げてばっかじゃ始まらないか。」

「・・・いいよ。」

「あつがとひ。」

京介は部屋に入つてくれるこまゝ、俺を抱きしめた。

「いめんな、お前を不安にさせへ。」

ほんと、あるいな。

こんな風に、切羽詰つて言われたら、許すしかなくなるじやん。

「まず、せつものこと、お前が邪魔なんことは決してない。それだけはすつと覚えててくれ。」

「うふ、わかつた。」

「あと、お前を養子に迎えた理由だけど、本当に悪いんだが今は言えないんだ。でも、俺はお前といられて楽しいし、嬉しい、今はこ

れだけしかいえない。」「

「うん、わかった。」

「言つべきときが来たら絶対言つ。だからそれまで待つてくれるか?」

「うん、わかった。」

「ふ~、やつと収まつたか。」

そつこいつと、京介は意地悪い表情になつて、

「お前、そつああのお見合この『真見て嫉妬してただる。』

「な、そんなわけないだろ。」

「いいんだよ、子供が親を独占したいって気持ちはわかるからな。」

そんなんじゃないんだ、俺もしかしたら……。

「ん? 何赤くなつてんだ。」

「ば、赤くなんて。」

親子つて強調されると本当に心が痛む。

でも、こんなこと京介には絶対いえない。

だつて、そんなこといつたら…。

やぱり、京介を困らせるとなる。

「ひむこひるひ、

「…俺。」

とびつきの優しい声でそう話しかかられた。

「俺は、嬉しくよ。お前が、俺のことそんなに想ってくれてるなん

てさ。」

「だ、だから、独占したいとかそういうのは……。」

「あるんだろう。」

「う。」

「お前って本当に表情に出すもんだな。」

「だつて、俺。」

「俺だつてそうなんだよ。」

え？

「俺だつてお前を独占したい。学校とか弟とかの話聞くと嫉妬しち
まつ。でもさ、こうやってお前が俺を思つてくれてる。それだけで
今は十分なんだ。」

そういうって、俺の頭をクシャクシャなでると、

「だからさ、不安になるかもしれないけど、今は俺を信じろ。俺はお前のそばから離れないから。」

そうして、真剣なまなざしこなつて、

「その代わり、お前も俺から離れられると思つたよ。」

「ずるこよ、京介さんは。」

「何がだ？」

「だって、いつもほクールなのにこんな。

「悪いな、本気の俺はこいつなんだ。」

「でもや。。。」

「ん？」

「俺も、本当に嬉しい。」

思いつきり笑顔でいったら。

「う。」

いきなり京介は俺を放して、

「じゃあ、もう気は晴れたな、おやすみ。」

やつこいつ部屋を出て行ってしまった。

「どう、どうしたんだ?...こきなり。」

でも、気持ちもすつきりして、俺はその夜べつすじと眠れた。

部屋の外で、

「やばいな、このままじゃ、本当に犯罪者になっちゃう。」

やつ京介が言つたのは俺には聞こえなかつたんだ。

それから、俺はしっかりと家事も部活もこなし一生懸命がんばった。

犬を飼つまでは京介も早く帰つてきてくれるから寂しくないし・・・。

いや、寂しいってわけじゃないんだけど、やっぱり一緒にいることが
心するって言つか・・・。

まあ、なんだかあの日以来、京介が俺の「」とじつと見てることがあ
るような気がするんだけど。

そうして、今日は金曜の夜。

明日からは休日だって時(うちの学校は、週休二日制)

「偉、明日と明後日は何も用事がないか?」

「うそ、別にないけど、どうして?」

あ。

「もしかして、犬のこと?」

ぱーっと明るくなつて聞いてみたんだけど。

「いや、悪いんだが今週は違うんだ。」

「えへ、せつか残念。」

ちよつとしょんぱりしてると、

「来週には一緒に見に行つてやるから、それまでは俺で我慢しろよ。

」

せつこうつて、頭をくしゃくしゃとなでられた。

ほんと、京介以外だつたら「んな」とされたら、子供扱いすんな、
つて怒りたくなんのに・・・。

「ん、京介さんが一緒にいてくれんなら、別にいいけどね。」

そうこうでこいつ笑つたら、

「あへ、せつもの」となんだけどな、」

そうこうで手を呑み込んでしまつた。

せつ、なんだか最近いつもやつてにじつとかすると、少し離れていつ
おやつんだよな・・・。

ちよつとそれが今の俺の不安になつてたりするんだけど・・・。

「実は、お前のひとそろそろ母に会わせないといけなくてな。」

「え? 京介さんのお母さん?」

「そう、今高鳥の当主は俺つてことになつてんだけど、実際は母の力もそれなりにあるんだ。」

「へへ、そういうえば俺、京介さんの家つてどう感じなんか聞いたことなかつたんだけど。」

「ああ、せつかくだから話しておくか。まず、わざと言つた母。父は先年病氣で亡くなつた。兄弟は上に姉が一人、下に弟が一人いる。姉はすでに結婚していて、双子の子供がいる。」

「え、双子？」

俺、実はまだ双子って見たことないんだよな。

だからあつたらきっと楽しいんじゃないかなって思つてたんだけど、

「ああ、一卵性らしいがな。」

「一卵性？」

「つまり、顔つきとかが酷似してゐるわけじゃないんだが。」

「な~んだ。」

ちょっと、残念かも。

「それで、その二人は今何歳ぐらいなの？」

「ああ、僕と同じ年だよ。姉は早くに結婚したからな。」

「え、じゃあ結構、お姉さんと京介さんって年離れてるんだ。」

「ああ、昔はそのまま姉さんが当主になれるって話も出したほどじゃ
ぞ。」

「へ。でも、同じ年の子か。仲良くなれるといいな。

「まあ、こんなとこりか。それと一応明日は親族集会つてことにな
つてるからほかにもいろいろな人が来るからな。僕も会場内を走り
回ったりしないようにな。」

「な、俺は子供じゃないっての。」

「はいはい、それじゃあ明日は泊まりになるから、用意して来いよ。

」

まだ、子供も扱ったことに怒つてたいけど、それよりも明日の
ことが楽しみで、とりあえず引き下がった。

「なんだか、最近京介さんにいつもあしらわれてるよつな気がする
な。」

いつ思いついでいる顔である。

act・11 本家？

「うわ～、すげ～。」

俺と京介は今、高鳥の本家の前に来ていた。

「そんなに驚くことか？」

「うん、だつて家も京介さんの家も洋風だからや。しかし、和風な感じのところは初めてなんだ。」

そう、ここは高鳥の家は完全な和風な感じだった。

なんていうか、お屋敷って感じがぴったり来る感じ。

「まあ、ここは俺の父の趣味みたいなのが入ってるからな。」

「え？」

「いや、時代物のドラマとかが好きだったんだよ。」

「へ～、そうだったんだ。」

だからといって、こんな屋敷まで建てちゃうなんて・・・。

「父も内装には結構凝つたらしいから使い勝手もいいんだがな。」

なんだか京介、かなり感慨に浸つてるみたい。

「お父さんってどんな人だったの？」

「ん？」

京介はこっちを向くと、

「そうだな、優しい人だったよ。まあ、俺はこうこう贅沢は嫌いだから結構ぶつかった事もあつたけど。」

「そっか……。」

やつぱり寂しいんだろうな。

「それより、そつそつ母さんのところに行こう。遅く行くところいろいいろさいから。」

そうして屋敷の中へ入つていった。

中の家政婦さんに奥座敷に通されそこで少し待つてみるとへりこの女の人人が現れた。

「久しぶりね京介。元気そうで何よりです。」

「お母さんも元気そうで。」

儀礼的な挨拶が終わると、俺のほうを見て

「あなたが近江から来た……。」

「あ、近江偉です。はじめまして。」

ペーパーとお辞儀すると

「はじめまして。そんなにかたくなうないでいいのよ。
あなたは京介の息子。私の孫に他ならないんだから。」

あ、なんだかすこく優しそうな人。

「それで京介、日奈や玲介にはもう会った?」

「いえ、これから会いに行こうと思っています。」

「今日は亮司さんは来られなかつたみたいだけど、鴻君と秀君は日
奈が連れてきてるみたいだから、あとで偉君にも紹介してあげてね。
」

「はい、母さん。」

「それじゃあ偉君。またあとでね。」

「あ、はー。」

そういうとスッと立ち上がりつて部屋を出てつてしまつた。

「それじゃあ姉さんのといひに行くか。」「行くわ。

「あ、あのぞ。」「ん?」

「いや、いろんな人の名前が出てきて混乱するつていうか……。」

「ああ、会つてから紹介するから気にするな。」

「そういわれてもなー。」

そして奥座敷を出て庭に面した3つの部屋のうち一番手前の部屋で、

「姉さん、失礼します。」

「どういたしまして。」

部屋に入るとかなり美人の人気がいた。

「京介、久しぶりね。あらその子……。」

「ええ、私の養子の……。」

「近江偉です。はじめまして。」

「あら、じ一寧^{かしほひな}にびづも。私は香芝田奈^{かしばひな}。京介の姉よ。ちよつと待つてね。」

そうして田奈さんは部屋の隣の部屋に、「鴻、秀、ちよつとこらっしゃい。」

「そう呼んだ。」

「何へ、母さん。」

二人の子が入ってきた。

そうして一人を見て、

「あ、君は。」

「あ。」

向こうも気づいたみたいだつた。

「何だ〜秀、知り合いなのか〜。」

「うん、ちょっとね。」

「そつか。俺は香芝鴻。」

「僕は香芝秀。かじばしゅう似てないけど一応双子なんだ。」

「あ、俺は近江偉。」

「それにしても京介叔父さんが養子を採つたって聞いたけど、同じ学校だつたんだね。」

「え、同じ学校なのか、秀？」

「うん、鴻はおバカさんだから気づいてなかつたんだよね。」

「誰がバカだよ。」

それを秀は軽やかに無視し

「僕は一応東稜で生徒会に入ってるんだ。だから君の事は母さんから近江つて聞いたときにはすでに知ってたんだ。まあ顔までは知らないがつたんだけどね。」

「え、生徒会!」

そう、うちの生徒会は優秀なメンバーでのみ構成されている。

「そ、まあ鴻は僕にくつづいて入りたがつてたんだけいかんせんバカだからさー。」

「バカつて言つた。俺だつてなあ・・・」

また軽やかに無視して、

「それじゃあ偉君よろしくね。」

「いひー、無視すんじゃねえ。」

なんだか本当に個性的な人たちで埋まつてるんだなー、と思う偉だつた。

act・12 本家？ 風の予感（前書き）

こんなにちは～。

なんだかあつとこひ間に1-2話です。

こうやって書き続けられるのも皆さんのおかげです。

本当にありがとうございます。

質問、誤字、脱字等ありましたら、気軽に感想によりこしくお願いします。

act・12 本家？ 風の予感

「ほんつといろんな人がいるんだね。」

「ああ、まあ確かに個性的な人間は多いな。」

あんたが言つくなよな、とは決して言わない。

「まあ、なんにせよ挨拶しておくれのはあと一人だ。」

そういって庭に面した三つの部屋のうち一番奥の部屋（一番手前は田奈さん、一番手は秀と鴻の部屋。）の前に行き、

「玲介、いるか？」

部屋の中はシーンと静まり返つてゐる。

「何だ留守なのか。」

その次の瞬間

「わ～、何だこいつこの、可愛い～。」

「うわ～。」

いきなり後ろから抱きつかれた。

「おい、玲介。」

「あ、兄さん久しぶり。ねえねえこいつ例の？」

「ああ、偉だ。」

「おい～。放せよ～。」

じたばた玲介の羽交い絞めから逃れようとしているとい

「おい玲介、そろそろ放してやれ。」

「え～、いいじゃん別に～。」

そういった直後、京介は怖い顔になつて、

「放せといつている。」

「わかつたわかつた、ほんと兄さんは冗談が通じないな～。」

ぱっと放され、俺は玲介にガルルと威嚇する。

「血口紹介が遅くなつたね、俺は高鳥玲介。たかとりれいすけ今は大学生だよ。」

握手を求めてきたが、俺は京介の後ろでまだ警戒する。

「あはは、なんだか嫌われちゃったかな。」

「当たり前だ。」

「でも兄さんの所に来てたのがこんなに可愛いやつだつたなんて、今度兄さんどこに遊びに行つてもいい？」

「絶対に来るな。」

「何だよけち。偉君独占なんてするこだわ。」

「するくない。俺は父親だ。一緒にいるのが当たり前だろ。」

「ちえー。偉君、兄さんに愛想尽かしたら俺のどこに来ていいからね。」

にっこりと微笑みかけられたがもちろん無視の方向で。

「偉、行くぞ。俺たちの部屋は離れに取つておいたらしいから。」

「あ、うん。」

俺は背後による玲介に細心の注意を払つて京介についていった。

玲介は微笑みながら俺たちに手を振つていた。

離れにつくと、

「なんだよあの人はー。」

「ああ、あいつは小動物系の人間を見るといつもああなるんだ。」

「つて誰が小動物系?」

「お前しかいないだろ。」

「くつそー、見てろ、今に俺だつて……。」

「今でも鴻には飛び掛つてゐるぜ。」

「え、鴻に！」

確かに鴻も俺に劣らはずちゅうからな。

「まあたいてい秀に阻まれてゐるがな。」

確かに秀はあつきいからな。

「それにしても、本当にあの一人似てないんだね。」

「ああ、双子つていつても似てないやつらは似てないんだな。」

「でも、さつきはありがと。」

「何が？」

「いや、あの人捕まつてたとき……。」

あの時、京介は本当に怒つていた。

俺のためにあんなに怒つてくれるなんて素直にうれしかつたんだ。

「ああ、あれは当然のことだ。偉も嫌がつてたしな。それに……。」

なんだか京介の俺を見る目がいつもと違つ。

「ちょっと色っぽい？」

「あ、俺さひよつとトイレ行ってくる。」

なんだかこの雰囲気が少し恥ずかしくなって思わずそういった。

「大丈夫か、この屋敷広いから一緒に行くか？」

「大丈夫だよ。俺、子供じゃないんだから。」

そつこつて部屋を出た。

トイレに行って用を足すと、改めてそつきの雰囲気が普通じゃなかつた気がする。

ふーっと一息ついた瞬間、

「京介さんもかわいそつよねー。」

とこう声が外から聞こえてきた。

え？

どうやら廊下から話しているみたいなので、トイレの入り口で隠れて聞き耳を立てる

「結婚もまだなのに子供を引き取られるなんてねー。」

「それにその子、近江の子だつてこうじ。」

「それに聞いた話だと、その子今の本妻の子じゃないらしいわよ。」
え？

「ううう私も聞いた。何でも本妻の人が自分の子を跡継ぎにさせたいためにあの子を追い出すようにしたらしくわよ。」

「それだからって何で京介さんなのかしらねー。」

「ううよねー。京介さんは顔も抜群、仕事だってできる、でも最近ではやっぱり子供のことがあるからって交際も全部断つてるんですね。」

「まあ、あの子もかわいそうなんでしょうがね~。」

・・・・・

俺は、離れへと向かつた。

さつきの気持ちはすべてきれいに消え去っていた。

俺はまっすぐ離れを田指した。

そして離れに戻ると、

「京介さん……。」

力なくそういった。

「ん? どうかしたか偉。」

やばい、泣きそうだ。

でも、はつきりさせないと。

「京介さん、俺が邪魔なら、……もひはつきりそつていいよ。

」

京介は驚いた顔をしている。

「何を……。前にも言つただろ、俺にとつて偉は……。」

「もひいいんだ!」

そつ、この人の優しさにもひせいでちやいけないんだ。

「俺、知ってるんだ。俺の母さんは本当の母さんじゃないって。」

「・・・なぜそのことを。」

「そんなこと畢ひつてしまいんだ。それで、追に出たために無理せり京介さんに押し付けたって。」

やばい、やばぱり我慢しても涙が出てきた。

「・・・優しい京介さんは、断れなかつたんだよね。」

「・・・違つ。」

「違くない、俺のせいで、せつかくの結婚とかも全然できなくなつちやつて。・・・でもね。」

俺は決意を決めて、

「俺、京介さんが本当に好きだから。だからそんな風に京介さんの邪魔になつてたくないんだ。」

う、やばい。言つてから涙が本当にあふれてきた。

「・・・きよみんち、京介さん。」

やつこつと、一田散に離れられて行つた。

京介はそれをすぐ元に追おつましたが、

「少し待ちなさい。」

それを止めたのは日奈さんだった。

「止めないでくれ姉さん。」

「いいえ止めます。話は・・・失礼でしたが、大体聞かせてもらいました。今そのままあなたが偉君を追えば、きっと二人とも傷ついてしまいます。」

「じゃあどうやつて。」

「私に任せなさい。それでここに偉君をまた連れてきます。それからあなた次第です。」

そういうと、

「あなたも少し頭を冷やし、覚悟を決めておきなさい。」

凛と言つと、日奈さんは偉のあとを追つた。

「・・・あなた次第なんて、俺の気持ちは決まつてる。だが、あいつは・・・」

日奈が出て行つた部屋では一人京介が悩み続けているのだった。

act・14 悲しみから立ち直り

俺はひとりあえず屋敷の庭の隅にヘタツと座り込んだ。

「へ、これでよかつたんだ。これで・・・。」

少し落ち着くとまた涙が止まらなくなる。

いつからこんなに涙腺がゆるくなつたのかな？

そりやつて自問してみたら、それは京介と会つてからだつた。

「ひっく、京介さん。」

本当は一緒にいたい。

一緒にご飯食べたり、一緒にしゃべったり、一緒に寝たり・・・。

本当はもうひとつこんなことを一緒にしたい。

でも、それはだめなんだ。

俺が京介を縛る鎖になつてしまつ。

そんなのはいやだ。

京介には・・・、あの意地悪だけじ本当は優しい京介にはいつも自由でいてもらいたい。

だから、 もう・・・ もうなんなんだ。

そうやって氣持ちは踏ん切つをつたがつても涙は止まらない。

むじりむじりよつ勢いが増すへりこだ。

やつやつて連鎖を続けてくると、

「 うそなごはんこましだが。」

誰かの声がした。

声のまづき振り返ると、

「あ、えっと田奈さん?」

やば、泣いてるの見られちゃやばー。

といふに涙を拭おうとしたが、

「 これをお使こなせ。」

やつこつてオレンジ色のハンカチを渡された、

「え、でも。」

「 気にしないでいいですよ。泣きたことがないんだからな。」

「

そこわれても、泣ける所じゃない、

俺は涙を拭うと、

「あの、田奈さん、どうして？」

「失礼でしたが、先ほどの話を聞かせてもらいました。」

ズキッと心が痛んだ。

「それで、偉君はこれからどうするつもりなんですか？」

「え、これから……。」

「そう」われば、確かに……。

「えへと、とりあえず実家に連絡して寮に入れるようにしてもらおるようになります。たゞがに追い出した子でも見捨てたりはしないと思つので……。」

そして、少しでも明るく振舞おうと、

「友達が今相部屋のやつがいないって言つてたんですよ、だからそこに入れもらえたならなって。」

「偉君。」

「は、はい？」

唐突に呼ばれ少し驚いて返事をすると、

「あなた、また涙が出ていますよ。」

え？

あれ、何でだらり。

わざわざ田奈さんに見られなによつに止めたはずなのに・・・。

「自分でも氣づけないほど苦しいのね。」

「そんな、本当に苦しかったのは京介さんの方で・・・。」

そり、本当に苦しかったのは京介なんだ。

「偉君。どちらにしてもこのままじゃ、あなたも京介も一人とも大きな傷が残ってしまいます。あなたが戻るにしても戻らないにしても、この話だけは聞いておいてくれるかしら？」

「この話？」

「わざ、京介のね。」

俺は「ぐく」とうなずいた。

「京介もね、あなたと同じよう、正妻の子ではないの。」

「えー。」

「私とあの子が年が離れているのでも分かるよう」、正妻はどうしても男の子が産めなかつた。でも当時は男の子がどうしても必要だつた。そのために、父はある方法を探つた。」

「…………。」

「その方法には、母も賛成した。自分のことよりお家のことの方が重要。そう思ったのね。そして……。」

日奈さんは俺のほうを見てゆっくりと

「そのとき産まれたのが京介だつた。ただ、産後の状態が悪かつたのかあの子の母親は京介に会うことなくこの世を去つた。そして数年後、母は玲介を出産した。」

「え、それじゃあ。」

「ええ、でも母は京介も実の子のようにかわいがつていた。そして実力と人格どちらも揃つたとみなしたとき、玲介ではなく、京介以後を継がせることを決めたのよ。」

でもね、と日奈は続けた。

「やつぱりあの子にも負い目があつたみたい。家族は何も言わないでも使用人は平氣でいろいろ口にする。あの子は実直に周りからの視線をすべて跳ねつけるようにあらゆる面で完璧にすべてをこなした。そして、その結果あの子は他人から何も欲さないようになつた。でもね・・・。」

日奈さんはそこで俺のほうを見ると、

「あなただけは違った。」

「え？」

「一度近江邸で見た少年が忘れられないってあの子が田を輝かせてそういった。そして、その子が無理やり養子に出されそうになつていると聞いたら、すぐに保護しようと動いた。あの子にとつて人生で初めて欲した人、それがあなたなの。」

俺は言葉を失つていた。

「・・・京介さんがそんなに俺を？」

「ええ。」

「・・・俺、それなのに京介さんにあんなこといつて・・・。」

田奈さんはこつこつ笑つと、

「気持ちちは落ち着いたかしら？落ち着いたのなら早くあの子のところに行つてあげて。あなただけが今、あの子の絶望を払つてあげられるから。」

俺ははつとした。そして涙を拭つて、

「ありがとう田奈さん。」

そういつて走り出しだが、すぐに振り返つて、

「田奈さん、京介さんの話、教えてくれて本当にありがとうございます。今度鴻たち連れて遊びに来てよ、お礼がしたいから。」

「ええ、鴻も秀も喜びます。でもね、お礼なんて気にななくていいのよ。私たちは家族なんだから。」

俺は大きくなづくと離れへと走つていった。

「京介。あなたは本当にいい子に恵まれますね。」

田奈がいつこつたのはすでに僕には聞こえなかつたのだった。

act・15 困想い（前書き）

文章が恐ろしくまとまりませんでした。

実力不足を痛感する毎日です。

act・15 回想い

「こんなに離れまでの距離が遠かつたなんて・・・。

俺は急いで駆けていった。

途中何度も人とぶつかりそうになつたが、構うもんか。

自分の本当の気持ちに気づいたんだから。

離れにつくと京介は目を閉じてじっと座っていた。

「・・・京介さん。」

京介はゆっくりと目を開け、

「偉・・・。」

そういうて近くまで来て俺を抱きしめた。

「偉、俺はお前が邪魔だなんてそんなことはない、やうこつたよな
？」

俺は「ツクリとうなずいた。

「『』めんな、あれは少し間違っているんだ。」

「え?」

「俺にはお前が必要なんだ。だから手放すことなんてできない。」

「俺も・・・」

「いいじゃつたり言つんだ。

「俺も京介さんと一緒にいたい。優しい京介さんと一緒にいたいんだ。」

そういつたら、京介はふいつと横を向き

「・・・優しくなんかない。」

そういつた後俺を見て、

「僕、前にお前を近江邸で見たといつたよな?」

俺は「クッといはずく、

「俺はその時本当に楽しそうに笑つてゐるお前を見た。本当に新鮮だつた。昔からいつも周りは俺に本当に笑いかけてはくれないし、俺自身もそう笑つたことはなかつた。それでその時どうしても俺にその笑顔を向けさせたかった。もしその時秘書がとめていなかつたら、俺は誘拐犯になるところだった。」

そして一呼吸おいて、

「それから数か月後、お前が俺と似た境遇であることを知つて、それで養子に出されそうになつてゐるのを聞いた。その時どうしても俺はお前が欲しくてたまらなくなつた。あの笑顔をどうしても俺に

向けてほしかった。俺はお前の言つよつた優しい奴なんかじゃない。
強欲で卑しい奴なんだ。」

俺はそれを全部聞いた後、

「・・・違つ。」

とつぶやいた。

「いいや、これが俺なんだ。」

「違うよー。」

俺は大声で言つた。

「もし京介さんがただの強欲な人だつたら俺・・・。」

少し、息を整えて、

「・・・俺、京介さんのこと好きになんてならなかつたはずだ。」

京介は一瞬驚いていた。

「さつさきも言つたら。俺は京介さんが好きなんだ。親子つて強調されるたびに本当は悲しくつて仕方なかつたんだ。京介さんが俺のことを遠ざけてるみたいで・・・。」

そつこつたら、京介さんはさつさきよりもきつく俺を抱きしめて、

「・・・バカだな僕。」

そういうで、

「そんなこと言われたら余計に放せなくなるだろ。」

そう言ってから

「俺が『親子』を強調してた気も知らず、本当にこいつは・・・。分かつた、教えてやる。俺が強調してた理由はな、お前を襲わないようにするための自粛だったんだよ。」

「え？」

「え、じゃない、今から体に教え込んでやる。」

そういうと、京介は性急に、でも優しく俺の唇を奪った。

俺は少しそれを拒もうと京介の胸を押したがびくともしなかった。

やばい、なんだかぼーっとしてきた。

そして、京介が俺のズボンに手をかけたとき、

「は～い。そこまで。」

後ろで声がした。

京介は俺を抱きしめたまま俺の背後にいる人に少し怒りつつ、

「秀、邪魔をするな。」

そういった。

「別に邪魔するつもりはないんですけど、いいんですかそんな強引で。僕のそういうことに対する気持ちも確かめずに、そんなことだから僕を不安にさせるんですよ。」

「…………」

「じゃあ、俺はこいつら辺で、お邪魔しました～。」

秀はさわやかに去つて行つた。

「…………」めんな、僕。

京介はポツリといつた。

「最初は笑顔だけでも欲しかった。でも、今はお前が欲しい。だからちょっとしたことでもこうなっちゃう。僕、俺が怖かつたら俺から・
・・・」

そつ言われた直後、今度は俺のほうから京介の唇を奪つた。

「…………」

「俺だつて男なんだからな。」

「？」

「だから、その、確かに今わしきのはいきなりで驚いて少し拒んだ

やつたけど。でも、俺だって京介さんが欲しいんだよ。だから・・・。
「

そういうと京介は下を向いて少し笑いながら、

「ほんと、お前ってやつは・・・。」

とか言いながら笑っていた。

俺は少しうつとして、

「だつて京介さんが・・・。」

「京介。」

「え?」

「これから一人だけのときはそいつ呼んで。」

「え、だけど。」

その後また唇を奪われた。

しばらくすると、

「好きだよ、偉。恋人同士はこう呼ぶもんだろ?」

俺はかーと赤くなつた。

「さあ、偉。」

「え、あ、きょ、京介。」

夏空の下、晴れて俺たちは結ばれたのだった。

act · 16 鴻と秀（前書き）

少し閑話休題です。

act・16 鴻と秀

「偉～。俺の心の拠り所はお前だけだよ～。」

がしつと手を握られた。

どうしてこうなったかといふと、

約1時間前。

祖母の招集に従つてみんな一堂に会して食事つゝことになったんだ
けど、その途中のこと。

「鴻～。叔父さんのところおいで～？」

「わやー。近づくなー、変態～。」

鴻はまた玲介に追いかけられていた。

「ねえねえ、京介さん。あれ助けなくていいの？」

「ああ、こつもの」とだしな。」

いつものことって……。

なんだか鴻が不憫な。（まあ、ある意味玲介もかな？）

「それにな、この後はたいてい……。」

「玲介叔父さん、俺のいない間に面白こじとをやつてくれてますね。」

「

お手洗いから戻ってきた秀は部屋へ入るなりそつ一言言った。

「あ～秀。 そつ思つんなら邪魔しないでくれるか?」

なんだか、嫌な予感。。。

「あなたは鴻に嫌われてるんですよ。 理解できていんですか?」

バツサリ言つたなー。

「何言つてんだ。 嫌よ嫌よも好きのつかつてな。」

いや、叔父さん、そりや無理があるんじや。。。

そろそろなんだかやばそつなので、俺は京介の服の裾を引っ張つて、

「ねえねえ、とめなくていいの?」

と聞いたら。

「ん、まあ氣にするな。」

まあ氣にするなって。。。

京介は平然と食事を続けている。

ところが、日奈さんもお祖母ちゃんも平然と食事を続けてる。

え、これって俺がおかしいのかな？なんて思つてゐる。

「あー、だから秀、なんでいつもお前は俺の邪魔をすんだよ。」

とつとう玲介は怒り始めた。

「なんだつて……。」

そうして秀は平然と、

「鴻をいじめたり泣かせたりしていいのは俺だけですから。」

秀は玲介にっこりとほほ笑みかけた直後。

ガツン。

鴻が思いつきり（でも、秀にはほとんど効いてなさそうだけど）秀の頭をひっぱたいた。

「なんだその理由は。俺はお前のおもちゃじゃねーんだぞ。」

「おもちゃなんて言つてないだろ。鴻は俺のかわいいお兄ちゃんだつて……。」

「だー、だからかわいいとか余計だろ。兄だと思つんなら少しは尊敬とか……。」

言った瞬間秀は笑い出していた。

「何がおかしいんだよ。」

「いや、鴻を尊敬つてあんまりにも・・・。」

そういつた瞬間また鴻は秀の頭をひつぱたいて、そのあと俺のまつに来て、

「僕、庭に行こう。」

そういつて俺の腕を引いてすたすた走り出したのだ。

(この時、京介は少し鴻のことをにらんでいたが、とめはしなかつた。)

そつして庭につくと、

「あへ、もへ、なんでうひのやつひなじんな變な奴らばっかなんだ。僕もそり思ひだろ?」

「うへん、まあ確かに・・・。」

「やうだらへ、よかつたへ、やっぱり僕は普通だつた。」

そういつた後

「特に秀だ。あいつ俺のまつが兄だつてこいつにかわいいだとか言いながらつて。」

「あへ、確かにその気持ちわかるかも。俺もさへ、実家に一人弟がいんだけど、そいつも俺のことかわいいとかいづしね。」

なんだか、めちゃくちゃ鴻と話が合って、その後一緒に意気投合しながら話、冒頭の部分に戻る。

「よ～し、僕、これから昼飯とか一緒に食べようぜ。それで、平和な学校生活を一緒に送ろう。」

「あ～、俺今、相沢つてやつと一緒に昼飯食べてんだけど、そいつも一緒にいいか？」

「全然オッケー。今度僕から紹介してくれよ。」

「うん、わかった。」

そうして、鴻は

「まつたく、秀の奴、性格破綻がなかつたら美形だしいいやつなはずなのにな～・・・。」

あれ？

鴻？

あ。

「へー、鴻つて僕のこと美形つて思つてくれてるんだ～。」

「げ、秀。なんでこ～こ～いるんだよ。」

「なんでつて、鴻が大声で僕に庭に行こうって言つたんだろ。だか

「ら追いかけてきたんじゃないか。」「

「なんだって、俺は偉だけに言つたんだ。そんなの盗み聞きだ。」

「まつたく鴻はほんとにバカだな。あれを盗み聞きだつていうなら何を盗み聞きつて言わないんだよ。」「

まあ、確かに・・・。

「でもクラスから出て帰つてのはいただけないな。僕と一緒にいるれないじゃないか。」「

「だー。だからそのためだろ？」「

「じゃあ、あの秘密、ばりじしちゃおつかな？」

「ー。」「

「え、なになこ、秘密つて？」

「あのね、鴻はね、嘘・・・」「

「うわー。秀、お前うょつといひつけられてい。」「

やつて秀を引っ張つて行つてしまつた。

行つてしまつ直前。

「ぐめんな~偉~。今度絶対そつち行くから、その時はよろしくな
う。」「

そういうて行つてしまつた。

「わかつただる。」

「うわつ。」

後ろからこきなり京介に声をかけられた。

「あの一人はなんだかんだ言つても、いつも仲がいいんだ。」

「まあ確かに・・・。」

「それより・・・。」

といい、いきなり唇を奪われた。

「俺を寂しがらせた代償はどうやって払つてくれるんだ？」

「な、京介寂しかったの？」

「当たり前だ。いきなりいなくなつたらな。だから・・・。」

そういうて、俺に顔を近づけ

「絶対にいきなりいなくなつてここで誓つてくれ。」

まつたべ。

ほんと鴻の言つとおりだな。

「わかつた、誓つよ。」

「絶対だからな。」

なんだか、こういう時の京介ってかわいいんだよな。

そうして俺のほうから京介にキスをした。

「うん、絶対だよ。」

庭には涼しい風が吹いていた。

act · 16 鴻と秀（後書き）

閑話休題のつもりが最後で……。

やつぱり本編につながってしまつものですね……。

act・17 部活and僕の危機

一族集会から帰ってきて2日後の昼休み。

俺とシュンは真中先輩に呼ばれ部室に来ていた。

「全員そろったな。」

「全員どこにいるかの人数でもないがな。」

真中先輩は沖下先輩をちょっとこちらでから、

「みんなよく聞いてくれ。今我が部は非常な危機を迎えている。」

な、入部して早々一体どんな危機が。

と思つてゐると、

「部員の人数が足りない。」

俺とシュンは一瞬硬直した。

そして、その硬直を破ったのはシュンだった。

「せんぱーい、驚かせないでくださいよ。大体前々からのじじやないっすか。」

「いや、今回はそれだけでなくてな。」

沖下先輩がわざわざ口をはさむとは・・・。

よほど重大なことなのかもしない。（？真中先輩に失礼。）

「今季から、部員数5人を下回っている部活は、実質廃部なんだ。」

「えー！」

「やう、今年から予算の削減をきつちりするらしくて・・・。だからこそこ何とか部員奪取に全力を注いでいたんだが・・・。」

「よく言つ。誘おうとしても、みんなから断られて一人で落ち込んでたくせに。」

「む、うるさいな。お前のほうはどうだつたんだよ？」

「俺か？何度も勧誘には行つたんだが、なぜだか俺が話しかけると皆萎縮してしまつてな。」

要するに、この部活のメンバーはみんな勧誘下手つてことか・・・。

そんなとき、あらうことかシュンがこんな提案をしやがった。

「じゃあさ、僕を女装かなんかさせて、それで勧誘したらどうですか～？」

「な、何言つてやがんだ、バカ。」

でも先輩方には受けたようだ、

「確かに、その方法もありだな。近江は小柄だし、そういうのせりでも違和感はないし、むしろ構いたくて入ってくるやつも多く出でくるだろ?」

「な、俺女装なんかやだぞ。絶対しないからな。」

そういった直後、真中先輩に両手をがしつと握られ、

「近江君。恥をかき捨てて言おう。部活のために死んでくれ。」

いや、死ぬってあんた……。

でもこのままだと本当にやばいわしだ。

そつ思つてとりあえず。

「だったら俺探してきます。もし入れるにしても、にわか部員よりしつかりした人のほうがいいでしょ?」

「でもな~、もうあらかたちやんとした奴らは部活に入っちゃってるし……。」

う、確かに……。

でもこいつであきらめたら、女装への道しか残っていない……。

「と、とつあえず待つててください。探してきますから。」

とつとつと歩きの場でそつと壁つてしまひたのだった。

やつして、教室へ戻つてきた。

「はー、ほんとやがれっすな・・・。」

「だへから、おとなしく女装すりやすむことじやん。」

俺はキシヒシコソをにらんでいた。ひつひつした。

「だつたらショーンが女装すりゃこーだる。」

「冗談。俺なんかがしたらむしろ変な部活つて噂が立つて、誰も入つてこなくなるだろ。」

「だからひなんで俺が女装なんだよ。」

「なになに、偉が女装すんの?」

「な、だから偉が女装さえすれば、部員なんて簡単にゲットだぜ。」
「うー、ショーンのバカやがー。見てる、絶対に部員を捕まえてきてやるー。」

「うー、群がつていたやつらを押しのけとつあえず教室から退散した。

それについて、ほんと、やがれっすな・・・。

確かにシコンの言つとおり大部分の人間はすでに入部を済ませている。

あと入つてないのは、最初から部活をする気のない奴らがほとんどだ。

途方に暮れて歩いていると、

「あれ、僕じやん。どいつしたんだよふうふうじい。」

声のほうを見ると、

「あ、鴻。」

「なんだよ氣の抜けた返事だなー。どつかしたのか?」

「あー、まあ。」

俺は「」とのあらましを鴻に話した。

「ひつでーな。それで僕が困つてんのか。よし、だったら僕が入つてやる。」

「え? 鴻つてまだ部活入つてないのか?」

「ああ、なんだか結構悩んじゃつてな。でもこれも何かの縁だし、僕のためだ。」

「へへ、鴻つてば、陸上部に入んだ。」

「あや～、秀なんでこいつもお前はこきなり現れんだよ。」

「なんでって、あんまりにも鴻がバカそつな声をあげてたから。」

「へ、ひるとい。大体俺が陸上部に入つけや悪いのかよ。」

「こや、悪くはないんだけど・・・（鴻はかわいいから野放しにすると心配なんだよな～）」

「なんだよ、いきなり静かになつて。」

「こや、なんでもなこよ。あ、ひつだ、じやあ俺もなこればいん
だ。」

「な、お前が。やめや。せつかく落ち着ける場所ができるのこ～。」

「

秀はちよつとムジとして

「へ～、俺がいたら鴻は嫌なんだ～。」

そうこうと、途端に秀は悲しげな表情をして

「やうだよな・・・こいつも鴻に迷惑かけるもんな・・・。」

「え・・・。」

鴻は少しづづとこして、

「や、そんなことないぜ。まあ、確かに嫌味の率は高いけど迷惑ってことは……」

「じゃあ、俺が入つても大丈夫だね。」

そうこうと秀はこちらを見て、

「じゃあ偉、よろしくね。」

そうこうして秀は教室へ引き返していく。

後に残された鴻は小声で「騙された」とつぶやいていた。

とつあえず、当面の危機は去つたかのようと思われた。

act・17 部活 and 妻の危機（後書き）

今更ながら、B「」なのにこの登場人物のあざむきがいかがなー、なんて思つてゐる今日この頃です。

act · 18 — 難去つて・・・(前書き)

act・18 —難去つて・・・

「といつわけで。」

俺は、秀と鴻をつれて午後、部室に向かつた。

「「」の二人が入部してくれる一人です。」

「「」紹介に預かりました。香芝秀です。よろしくお願ひします。」

「そんで、俺は兄の（「」重要）香芝鴻。」

「えへ、兄へ。ちつ「」の「」？」

あ、シユン「」らない」とを・・・。

と思つたが、すでに鴻は、

「なんか文句あんのかよ～。それに、僕のこと女裝させようとしたやつはお前だな～。天誅だ～。」

と言つてシユン「」とびかかつていた。

それを少しほ～と眺めると突如真中先輩が俺の両手をがしつと握つて、

「近江君。君はなんて素晴らしいんだ。それに入部早々部員同士がこんなに仲良くなれるなんて。」

いやー、Jのやり取りを仲がいってたれるのはあなたくらいかと。
。。。

そいつにひじりこむうちに秀が鴻をショウンから離すためヒョウイット
鴻を持ち上げていた。

「ひー、秀、放せ。あこつにまもつと制裁が。。。」

なんてこいつているが、すでにショウンはノックアウト状態だった。

「ひー、もつ充分だろ。」

「まだだ、まだ全然足りない。」

「わー。あんまり聞き分けがないと。。。お仕置きしちゃうつぞ?」

「な、ふざけんな。Jの。。。」

そつこつて鴻は赤くなつてうつむいてしまつた。

まあ、一段落(?)してから、

「それより部長。ひとつほど聞きたいことがあるのですが。」

秀はそう質問した。

「もちろん、なんでも聞いてくれ。」

真中先輩は新入部員確保のためか、意気揚々と答えようとしている。

「まず一つ目。現在、陸上部は顧問不在といつことですが、今回改新された規約では顧問が必須といつことですが。」

「ああ、そのことに關してはもう少し先生たちをあたってみよつと思つてゐる。」

「せうですか、それではもう一つ。いかいのめつが重要なのですか・・・。」

そういつと、秀は全員を見回して

「皆さん、中間試験は来週からといつのは忘れてはいませんか?」

といった。

一同(沖下先輩を除く)はみんな一様に固まつてしまつていた。

「ちなみに、赤点をとるよつなことがあれば、休部扱いになるので、部員扱いはされません。すなわち・・・。」

みんなは「クツ」と息をのんだ。

「部員内で赤点者が一人出た時点で、陸上部は解散といつことです。」

秀は淡々と言った。

部室内を冷ややかな風がサーッと吹いた。

act・18 —難去つて・・・(後書き)

最近は学園内のことが多くなつてしまつていて志愛がどうしても進まないですが、きっと進展をさせてますので気長にお待ちください。お読みになつてくださつて居る方々には日々感謝の念を忘れず精進いたします。

act・19 専属教師（前書き）

現在、交流サイトにて、イラスト募集いたしております。

気になつた方がいましたら、どんどん交流サイトのほうに足を運んでみてください。

「は～。」

家に帰つてからため息が絶えない。

それもこれも、帰つてきてから試験勉強のために問題集を解いているのだが、進み具合が相当に悪いためである。

「おい、偉。帰つてから部屋に引きこもってどうしたんだ？」

「あ、京介。実はね・・・。」

そして、俺は現在の状況を全部話した。（試験のこととか、赤点とつたらダメとか、顧問不在とか）

そう言つたら、

「・・・お前つて頭悪かったんだ。」

つて言つて、

「大体、赤点にする奴なんて内部生单体だろ。」

「う～、だつて・・・。」

「だつて？」

う、実はあんまり言いたくない・・・。

「どうしたんだ？」

「どうやら、景つしかなれりつだ。

「あ、あのね。俺つてさ近江の方ではさ、いつも勉強とか景に見てもらつてたんだよな～って。」

「景に？」

あ、やっぱり京介嫌な顔した。

「景つて、お前より年下じゃなかつたか？」

う。

「景つてさ、学校の勉強は暇だ、とか言つて高校の勉強とかどんどん一人で進めちゃつてるんだよね～。」

なんだか京介の顔がむつきから笑つてない。

「やうか、なら今日から俺が教えてやる。」

「え、京介が？」

「なんだ、不満か？」

いや、不満つて・・・。

そうじやなくつて、なんかすつゞく緊張するつていうか・・・。

「大丈夫だ。俺は大学時代、家庭教師のアルバイトもしてた。」

「どうかららへ、そうじやなくつてへ。」

「第一、このままじや、お前のノートを見る限り、赤点は免れないからな。」

「あ、これは……。」

「そう、わざわざからずーっと部屋について勉強してるくせに、ほとんどまだ白紙の状態なのだ。」

「あ、でもさ。いつも京介も夜中勉強してるじゃん？それの邪魔になっちゃ悪いしさ。」

「そんなことは気にしなくていい。偉のためなら一週間くらいブランクを開けても問題ない。それとも……。」

少し、京介は寂しそうな表情になつて

「俺と一緒にいかか？」

う、そんな表情されると。

「嫌じやない。ただ、また京介の邪魔になつてるんじゃないかなってちょっと心配だつただけだよ。」

「邪魔なんてことないつていつても言つてるだろ。それにな、俺は本当だつたら、偉に四六時中構つてたいんだ。俺が寂しがりやなの

は知つてゐだぬつへ。

「こや、寂しがりや、で。」

「だから、いつも時べりこどんどん頼ひに。こじらへ。」

なんだか、こんな風に言つてもういふと正直つれしこ。

「うそ、ありがとう京介。」

素直にうそつて笑いかけると、

「・・・かわいい。」

そうこつてこきなつ抱きつけてきた。

「な、京介いきなつなんだよ。」

そうこつたが、それにに対する返答はなく。代わりに

「偉、このまま襲つてもいいか?」

とか、聞いてあやがつた。

「バカ〜、試験がやばいんだよ。」

「さうか、だつたら試験が終わつたとき、覚悟しとさよ。

え?

なんか、俺、今猛烈に墓穴掘った気が？

そうして、俺の専属教師による特訓（？）が始まった。

そのあと、俺は結局京介の部屋で勉強することになった。

俺がどうしても自分の部屋がいいって『』ねても、

「自分の部屋だと周りに誘惑物があすぎて集中できないだろ。」

と言われてしまった。

うー、京介の部屋で一人っきりで勉強するほうが緊張して集中できないよー、とは結局言えず現在京介の部屋の前で勉強道具を持って立つ立てる。

さあ、深呼吸して入るうつと思つた瞬間、

「何部屋の前で立つ立つてるんだ?..さつさと入れよ。」

「わー、なんで扉閉まつてんのにわかるの?京介ってエスパー?」

つて言つて扉を開けたら少し笑われて、

「・・・愛の力じゃないか?」

なんて言いやがった。

俺は赤くなりながら、

「つたへ、子供だと思つてからかにやがつて。」

つて言つたら、

「ほー、子ども扱いはいやか。」

なんてこいつて俺の手に持つていた勉強道具を素早く机の上に置き、俺をヒヨイッと持ち上げてベットのまうに投げた。

「な、何すんだよ。」

「こや、子ども扱いはいやだつてこりからな。」

そうこいつて、いきなりのしかかつてきました。

「・・・・偉。」

そして、こつもとま違つて色氣たつぱりのボイスでしゃべってきた。

や、やばい。この声だけでも心臓のキヤキが止まんなこー。

俺がドキドキして目を開じて、ふるふる震えてみると、

「冗談だよ偉。」

そうこいつて、離れてしまった。

なんだかちょっと物足りない、つて俺何考へてんだー。

一人であわあわしてると、

「それに、試験が終わったら相手してくれんだろう?」

「あ、それは……。」

「じゃあ、それまでは待ってるよ。」

そして、耳元で、

「僕に嫌われたくないもんな。」

とささやかれた。

「な、嫌いになるなんて……。」

「そうか?もし俺が野獣のよつてお前が嫌がるのも無視して襲い掛
かってもか?」

「えー、京介ってそんな願望あるの?」

「そうだったりどうする?」

なんて聞かれた。

俺が返答に困ると、

「大丈夫だよ。俺は僕を傷つけるようなことはしない。」

「俺が欲しいのはは偉の身体より、むしろ心の方だから。」

なんていってきた。

「……つ。なんだよ、もひ。」

「……偉？」

「もう心の方はとっくに奪われてんだよ。」

俺は赤くなりながらも、何とか言い切った。

その瞬間京介は俺をぎゅーっと抱きしめて、

「……ほんと、なんでお前は、こんなに俺のこと煽るみづなこと・
・。いいか試験が終わったときは覚悟しどけよ。もう今だって、
何とか自制してんだからな。」

「……わかったよ。」

そして俺は、京介を抱きしめ返した。

そして、現実に戻り、俺は京介に専属で勉強を教えてもらつた。

act・21 鴻のお願い（前書き）

皆さん、大変長らくお待たせしました。

長部、復活（？）いたしました。

これからは、またコンスタントな更新を続けていこうと思つています。

ところで、私は最近自分の小説の中で一番、鴻に思い入れが出てきました。

皆さんにも思い入れのキャラができていたらいいなー、と思うこの頃です。

もし、ありましたらどんどん感想にお書きください。

皆さんのが意見で、そのキャラのお話を書いていけるかもしません。

act・21 鴻のお願い

「僕～、秀のヤツ何とかしてくれよ～。」

悲痛な叫びで鴻がこりこりたのは、俺が京介から勉強を習い始めてから3日目の昼休み。

4時限目終了のチャイムと同時に鴻は教室に入ってきて、

「僕、部室で昼飯一緒に食べよ～ぜ～。」

そういうなり、俺の手を引っ張つて部室へ直行して今に至る。

「毎日毎日、勉強だ～、勉強だ～俺を机まで引っ張つていくんだけ。もし俺がなんか反抗しようものなら、『それじゃあ、鴻はみんなに迷惑をかけたいんだね。』だってよ。そんなこと言われたら、こっちは何もいえねーっての。」

「あー、確かにその気持ちはちょっとわかるかも。」

そう、あれからの京介はまさにスバルタだった。

休憩時間以外はきつちりと俺の勉強を見て、同じような間違いをするとかなり怒られ、そしてまた細かく説明された。

でもさ、なんだか本当に俺のこと考えてくれてるんだな～って思うと、途端にドキドキしてきちゃったりして。まあ、京介には言えなければ…。

「え？ 倖も誰かに留つてんのか？」

「あ、うん。京介さんに……。」

「京介さんが！」

だいぶびっくりされたな～。

「うん、せうだけど。」

「へ～、ちょっと意外だな～。」

「せう？」

「うん、だつてさ、昔は会合とかであつても、ほんと挨拶も儀礼的なもんだけだつたしや。結構固い人なのかな～って思つてたんだよ。」

「

「へ～。」

「それよつと。今日はお願いがあるんだ。」

そういうと、鴻はいやに真剣な口つきになつた。

「ど、どうしたんだよ。いきなり。」

そんな間も、鴻は俺にじりじりと近寄つてきた。

でも、真剣なまなざしでも、どつしてもそれが全部かわいさに移つ

てしまつのが鴻だつた。

「実はさ、今晚泊めて欲しいんだ。」

「へ？」

「といふか、勉強を教えてくれ。」

「大丈夫だけど、秀が教えてくれてるんじゃ・・・。」

「だーかーらー。あいつに教えてもらつてたら、神経すりへつてぶつ倒れちゃうよ。本當は母さんも父さんも僕を家に連れてこいーつて言うんだけどさ。今は生徒会の仕事もないせいか、あの悪鬼が・・・。」

そういつた直後、部室の窓が開き、

「だ~れ~が~、悪鬼だつて~。」

まさしく、悪鬼のように秀は登場を果たした。

「ぎゃー、秀~。いつからそこにはいるんだよ~。」

「う~ん。結構前から。」

「ストーカーだ。訴えてやる。」

「バカだな~鴻は。兄を心配に思う弟の健気な行動がストーカーになると思つてんの?」

「ビートが健気な弟だよ。いつも突然現れやがって。」

まだ少し涙田（相當驚いていたらしく）の鴻は田をひいひいさせながらそういった。

実は、正直俺も相当びっくりしたんだけど・・・。

「それにしても、面料やうなこと話してたね。せつかくだから俺も混ぜてもうおうかな？」

「だー。絶対だめだー。お前から離れるために俺にお願いしてんのに、お前がいたら何にも意味がないだろー。」

「へー。鴻はそういう風に言つただー。」

はた田から見て、鴻はギクッとしていた。

「こいつも毎晩毎晩自分の時間を割いて教えてあげてるのになー。」

「な、た、確かに勉強は教えてもらつてるけどなー。お前つていつも終わつた後に・・・」

そこで、鴻は、はつとして俺を見て、

つて、必死な顔で言われた。

「偉、今のはなんでもないんだ。忘れてくれ。」

「まあでも、鴻が嫌だつていうんならしようがないか。」

「え？」

「俺も、鴻には嫌われたくないからな。そんなにいやだつていうんなら、一人で行けばいいよ。」

あ、秀・・・。

これって、前にもあつたような・・・

「あ、いやつてわけじゃないんだけどさ。でも秀だつてたまには一人で勉強したいかな～つてわ。」

そういうと、秀はこり笑つて、

「全然。俺は鴻と一緒にいられる方が断然いいよ。

そういうと、秀は鴻を抱きしめていた。

「な、離せよ。こら。」

なんていつても、さつき突き放されたときは違つて、鴻は少しうれしそうな表情をしていた。

なんだかんだ言つても、この二人、仲いいんだよな～。

そう思つていると、秀はこっちを見て。

「それじゃあ、俺も行つても大丈夫かな？」

まあ、二人と一緒に、結構楽しそうかも。

そう思つて、俺は、

「ああ、大丈夫だよ。」

そういって応答した。

act・21 鴻のお願い（後書き）

次回はお泊り会です。

秀と鴻のお話も番外でちょっと書こうと思つています。
本当に、作者自身、鴻に思い入れがあるんですね。

act・22 お泊り会?

そのあと、俺は京介に連絡を取つて、二人が今日うちに勉強しにくる血を伝えたんだけど、京介はなんだか嫌がっていた。

でも、俺がどうしてもお願いつこねたら、何とか承諾をもらえた。

そして、現在玄関の前。

「へへ、ijiが京介さんの家か~。」

「へ~って、一人とも来たことないの?」

「ああ、ijiに来るのは初めてだぜ。」

「京介さんは日頃から忙しそうに働いていられるから遊びに来るとか昔からなかつたんだよ。」

「あ~、そつか。」

そして、鍵を開けようとしたら、ドアが突然あいた。

「うわ、京介・・・さん。帰ってきてたの?」

やばいやばい、驚いていつもの呼び方が出来やつた。

一応、俺と京介の関係はヒミツなんだよ。

まあ、秀にはばれちゃつてるみたいだけビ・・・。

「ああ、今日は仕事が早く終わったからわざわざ電話もひつた時にはもう家にいたんだ・・・。」

あ、なんだか京介、「だから、今日は長く一緒にいたの?」「つて感じの表情してた。

そつか、だからさつきちょっと泣つてたんだ。

「ひたすら京介さん。ひまらないものですが。」

「あ、秀。お前いつの間にそんなもの。」

「鴻みたいなおバカさんと違つて、俺は行動に抜かりがないんだよ。」

「なー、今からどうか行つてなんか買つてくる。」

そういう飛び出しあとした鴻に、

「あー、別にやうこいつのはこいだ。田奈姉さんは前にこいつのお世話をなつたしな。」

あ、それつて。

「それより、一人は家には連絡は入れたのか?」

「はい、父も母もぐれぐれも京介さんや僕に迷惑をかけないようこそ、と言つていきました。」

「あと、父さんが京介さんにようじして貰ってくれって。」

鴻と秀のお父さん・・・。

俺は会つたことないけど、京介が『』、鴻に『』やくちや似ているらしい。

だから、玲介叔父さんが相手なついていたらしけれど・・・。

「ああ、それなら大丈夫か。」

「鴻も秀も上^二がつて上^一がつて。」

「じゃあ、お邪魔しまーす。」

「お邪魔します。」

そういつて、二人は京介の家に入った。

今日一日。楽しそうな気がしてたまらない。

act・23 お泊り会？（前書き）

前話があまりにも短かつたせいで、友人から非難を浴びてしましました。

皆さんにもこの場をお借りして謝罪させてもらいます。

act・23 む泊つ会？

「ああ、それじゃあ勉強始めるか。」

「え？」

部屋に入つてから、俺と鴻は一回休む気満々だつたため、秀のこの一言に思わず驚いてしまつた。

「何が、『え？』だよ。俺たちは勉強しに来たんだろ？。」

「あ～、わうだけどや。秀、ちゅうと休んでからでも……。」

「だ～め。鴻はもう休んでる暇なんてないでしょ。」

「う～。」

「鴻つてそんなにヤバいの？」

「うそ、中学時代にもよく呼び出し食いつてたよ。」

「な、そのことまだつないよ。」

「ちやんとやねばできるのこ、こつもサボつてるからな～、鴻は。

「

「ひ、ひやせこになー。」

あれ、なんだかんだ言つても秀も鴻を完全にバカにしてるわけじゃないんだ。

それがわかつてちょっと俺がここにこしてると、

「なんだよ偉～。偉だつてどうなんだよ～？」

「え？」

「こいつも鴻と遜色はない。」

「な、京介・・・」

「な～んだ。偉、やっぱ一緒に頑張ろうぜ～。」

「だが、今は俺が教えるからな。だいぶいい線には来ている。」

「げ～、なんだよそれ～。」

「鴻は俺が教えてあげてんのにいまだに基礎がわかつてないもんな。」

「

「な、だからそういうこと言つなつて～。」

そうして、俺たちはリビングで（さすがに四人で京介の部屋は狭いといつか、暑苦しい）勉強を開始した。

基本的に、京介が俺を、秀が鴻を教えてるつて形にはなつてたけど、京介は秀にも鴻にもしっかり教えてあげていた。

なんだかんだ言つても、やっぱ京介ですよ」よな。

なんて感心すると同時にちょっと憧れちゃったんだ。

だつてさ、なんだかかっこいいじゃん。

平等に教えてあげられるつてさ。

でも、やつやつと思つた時、ちゅうと胸がちくつとした。

平等・・・つて何考えてんだろ。

氣を取り直して数学の問題をガシガシ解いていく。

一段落を迎えたとき。

「鴻と秀、風呂が沸いたからお前たち先に入つてこい。」

京介がそつこつた。

「ああ、俺たちは後でいりますよ。お世話になつてゐるのに先は悪いですか？」

「じゃねー。」

そうこうと、鴻は俺に背中このしかかつて（といつても鴻は小柄なのでじやれてる感じ）、

「僕、俺と一緒に入るぜ。」

こういった。

直後、ほんの一瞬京介の表情が曇った気がした。

「それでさ、ちょっとお願いがあんだけば、寝巻貸してくれないかな？」

「ああ、別にいいよ。取つてくるから、先に入つてて。」

「OK。じゃあ先に行つてるな～。」

そつこつて、鴻は風呂場に走つて行つた。

俺も部屋に寝巻を取りに行くためリビングを出ようとしたら、

「別にあの一人なら一緒に入らせても大丈夫ですよ。」

そう京介に言つ秀の声が微かに聞こえた。

そのあと、俺は寝巻をとつて、風呂場に向かつた。

「湯加減はどうだ～？」

「うふ。大丈夫だよ～。」

そうして俺も風呂場に入ると、鴻はふにゃ～っと湯船に浸かついた。

「鴻つて風呂ではこいつもこんな感じなのか？」

「うん。なんだか気持ちいいこというなつりやつんだよな。」

そうじて、またふにゃーっとしていた。

そして、俺が頭を洗つていると、

「それにしても、京介さんつてこんなに面倒見がよかつたんだな～。

」

と言つてきたので、俺は頭を洗い流し、少しふるふると頭を振りして水を飛ばして、

「いっつもあんな感じだけどな～。」

「そつか～？それより、偉、なんか今の犬みたい～。」

「あ～、それ、前に弟にも言われたんだよな～。」

どうしても、頭をふるふるして、水を切らないと気持ちが治まらないっていうか・・・。

もしかしたら俺の前世つて犬？

「でもさ～、秀つて本当に頭いいんだな～。」

ほんとに今日だつてほとんど鴻に教えてたし、京介に聞いてた部分だつて相当高度な部分だつた。

「あ～、あいつは昔からああなんだよ。でもさ、あれで小学校低学年のころは虚弱体質だつたんだぜ。」

「え、それ本当?」

「ああ、だからさ、昔はよく俺が守ってやつてたんだよ。でも、勉強はあいつに教えてもらつてた、そんな感じだつたんだよ。」

あれ、なんだかちょっと鴻が悲しそうな気がする。

「昔はよかつたんだよ。俺は勉強は教えてもらつてたけど、悪い奴とかからは俺が守つてやつてたんだ、でも今はさ・・・。」

「・・・鴻?」

そこで鴻は、はっとして、

「悪い悪い、なんでもないんだ。とまあえずあいつはこいつもあるんだよ。」

「ふ〜ん。」

もしかしたらさ、鴻がいつも秀に突つかかってるのって・・・。

でも、なんだか鴻と秀は本当の意味で仲がいいんだなって再認識できた。

「それより次は俺が頭洗う番。」

そつこつて鴻が湯船から出てきて、入れ替わりに俺は湯船に入った。

そのあともワイワイ騒いでいたら、京介につるわせてつて怒られて、

風田から出た。

act・24 お泊り会? (前書き)

いよいよネタが吹ききました・・・。

どなたかいい案があればHELP。

act・24 お泊り会?

風呂から上がり、そのあとまたひとしきり勉強をした。

そうして時間は過ぎてこそ、

「あ、やせ、むせ、ひるんな時間じゃん。」

時計をみると、すでに一時を指していた。

「じやあ、なんが終わりにして寝るか。」

秀がそう言つたら、鴻はいきなり俺の背中から抱きついてきて、

「偉～、一緒に寝よ。」

と言つてきた。

あ、また京介が睨んでくる。

もう、別に鴻には他意はないんだから。

やつしたい、

「それじゃあ、俺も一緒にさせてもらつかな。」

そう秀が言った。

そしたら益々京介の表情は怖くなつて、今にも、「だつたら俺も一緒に・・・。」って言わんばかりだ。

でも、京介がそういう前に鴻は言つた。

「えへ、なんで秀も一緒なんだよ。」

「へへ、じゃあ、お兄ちゃんの鴻はかわいい弟に寂しく一人で寝るつていうんだ~。」

「う、そんなデカい団体してそんなこと言つたつてな~・・・。」

そうしたら、突然秀は鴻を抱き寄せて、

「俺、鴻が一緒じゃなきゃ寂しいんだよ。だから一緒にいいだろ?」

なんて、甘くわざやいていた。

そしたら鴻は赤くなりながら、

「だ~、わかつたよ。分かつたから、さつさと放せ~。」

そういうながら、秀の胸の中でじたばたし始めた。

「まあ、そういうわけだから、偉、ようしくね。」

「あ~、了解~。」

とは言つたものの、京介が依然として怖い顔をしているのだけれど

ようかな～つて感じだ。

「とつあえず、俺の部屋に布団敷くから、一人ともサルバ。」

「OK。」

「ちよつと待て。」

セリヤとヒヅキが口をはさんだ。

「秀だけは、一いりて残れ、少し話がある。」

「はい、わかりました。」

「じやあ、偉、さつあと行くわ。」

そうじつて鴻は俺の背中を押した。

ちよつと、京介たちの話が気になるけど、まあいいか。

そのあと、俺と鴻は部屋に布団を敷いて、歯を磨いて、寝床に転がり込んだ。

「なんかさ～、合宿みたいで楽しそうな～。」

「うん、でもまあ試験って難題はあるけどね～。」

「まあ、もうだな～。でもや、今度は偉もひづき遊びに来いよ。母さんも父さんも楽しみにしてつか～わ。」

「うそ、絶対行くよ。」

そういひしたたら、秀が部屋に入つて来た。

「秀、京介さんの話なんだつたんだ。」

「ああ、別に大したことじゃないよ。」

やつこわれると、滅茶苦茶気になるつづか・・・。

「あれ、布団は一組でよかつたのに。せつかく鴻と一緒に寝られるかなつて期待してたのに。」

「あー、こんな夏の前に一緒に暑苦じくて寝てられるか。ほんつと、お前は何考えてんだかわからんねーな。」

「向つて、そりゃ鴻のことを四六時中考えてんだよ。」

そつこつた直後、鴻は布団をかぶつ、

「まつたぐ、付き合つたらんねー。俺はもう寝る。」

そういうて、本当にあつといつ間に鴻はすやすやと寝息を立て始めてしまつた。

「あら、まだにこんな早く寝られるんだねー。」

やつこつて秀は鴻の髪をなでていた。

その姿が本当に鴻が愛しこつて感じでちよつといの場にいがたい感

覚になった。

でも氣を取り直して、

「あのわ、秀。せつとき京介さんが話したこといつて……。」

「そうこいつと、秀はいつかを向いて、

「ああ、鴻にはああいつたけど、もやみんと僕のことだよ。」

「えつと、なんて?」

「うそ、僕に手を出したら、明日の朝口は持めないと思つて。」

秀はいつか笑いながらそいつたけど、僕は笑えない。

なぜなら、京介なら、本当にせつからねないから。

「まあ、俺も命が惜しいし、僕は心配せずに寝ていよい。」

「あ、あのわ。」

「いいで、俺はちよつと氣になつていたことを聞くことにした。」

「秀が昔は虚弱体質だつたって……。」

「ああ、鴻から聞いたの? うそ、本当だよ。」

「え、でも今は。」

「うん、もう全然大丈夫。むしろ、あの当時に少し感謝してねくれい。」

え？ それはどうして感じの顔をしてたら、

「鴻が俺から離れられない要因が作れたから。」

そういうふた秀の顔は少しきみしそうだった。

「鴻はそれがなかつたら、きっと俺からはすぐに離れて行つてしまふ。そうやつて縛つていなきゃいけないんだ……。」

なんだか、本当に落ち込んでいる。

いつつも自信満々な秀がこんな表情を見せると、なんだか俺も不安になる。

「……大丈夫だよ。」

「……偉？」

俺は、とつぞうにそういっていた。

言わなきやいけない気がしたんだ。

「だつてさ、なんだかんだ言つたつて、絶対鴻は秀のことを見ている。たとえ、そんな風な縛りとかがなくたつて、絶対鴻は離れないんじゃないじやないかな。だつて風呂でだつて、鴻は途中から秀の話題ばつかだつたし……。」

「偉つて案外鴻に似てるかもね。」

なんて言つてゐた。

「ああ、まあ体格とか似通つてゐると思つたが。」

「やうじやなへつて、性格的なところとか。」

「うへえ、と秀は歎んでから、

「お人よし。」

といつた。

「だ、誰が、お人よしだよ。」

思わず大声を出してしまつて、秀にシーツと言われてしまった。

まあ、幸いにも、鴻はぐっすり眠つて起きなかつたけど（とゆーか、ほんと子供みたい）

「でもや、京介さんが惚れた理由がわかつた気がする。」

「え。」

「もし、鴻が俺のこと相手してくれなくなつたら、京介さんから偉を奪つてのもありだな。」

「な、俺は京介だけの・・・。」

そういうて、俺が固まつてると、秀は俺の頭をなでて、

「冗談だよ。」

と言つてきた。

「それにしても、偉も京介さんにベタ惚れとは。」

「な、はめやがったな。」

「ほーら、やつぱり鴻に似てる。」

「う。」

「大丈夫。俺に、京介さんと偉の間を邪魔するような気持ちはないから。それに俺も鴻だけで手一杯。」

手一杯なんて言ひながら鴻の方を見る秀は本当に優しそうだった。

結局、そのあとはいつの間にか寝ちやつたらしくて、どうも記憶が定かじやないんだけど、もう秀はせつきみみたいな悲しそうな表情を見せなかつたつてことだけは覚えてる。

それから数日後。

無事に試験をすべて終了し、部員メンバーには幸い赤点者が出なかつた。

そして、今日はこれからのことについて簡単なミーティングをすると、沖下先輩に言わされて部室へ向かつてゐる。

「それにしても、ほんと助かつた。」

「ほんと、これで赤点なんてとつたら秀のヤツに殺されるビンがやすまなかつたからな。」

「そういえば、秀は今日はこれないんだって？」

「うん、あいつ生徒会のほうが忙しきりじくつてや。」

「あ～、そつか。それにショーンのやつも今日はなんか忙しげからつて来ないんだよ。」

「あんな奴はどうだつていこよ。」

そう、あの最初以来、鴻は完全にショーンを嫌つてしまつた。

まあ、悪い奴じやないんだけど、つて言つても、女装させよいつて発想をしたことなどをどうしても許せないみたいで……。

でも、まあ一緒に部活やつてくんだし、これから仲良くなつていいくかもな、なんて楽観的に俺は考へてる。

「それよつと、今日は顧問が来るんだろ。どんな人かな～？」

「そ～、俺もまつたく教えてもらつてないからな～。」

そつ、そつと沖下先輩が俺たちを呼びに来たとき、去り際に顧問が来るつてことをボソッと言つてたんだ。

「いい人だといいよな～ってあれ？」

そうこいつと鴻は立ち止まって部室の方を眺めていた。

「ん? どうかしたの?」

「いや、あれつてさ。」

俺も指さす方を見てみると、

「あ、京介さん。」

そう呼ぶと、京介はこいつを見て、

「僕と鴻か、遅いぞ。」

「遅いぞつて、なんでこんなところに京介さんがいるんだよ。」

そのあと言つた言葉に、俺と鴻はしばし呆然とせせらげることにな

る。

「ああ、今日から陸上部の顧問としてやってこへんとなつた。よろしくな。」

ときには変わって、部室の中。

秀とシユンを除く四人と京介は部室の中に集まつた。

そして、真中先輩がびくびくしながら紹介をした。

「あ～、今日から我が部の顧問として来ていただき、高鳥京介さんです。」

その直後、鴻がはいと手をあげて、

「あの、理事とかでも顧問つてやつてこいんですか？」

聞いた（真中先輩はその間おろおろしてた。）

「ああ、別に学校の規約には反してこない。さつき秀にも言つてみた。」

ま～そう言われちゃあ真中先輩もビリジョウもなかつたんだううな・・・。

「それで、俺は仕事も兼任してるので、あまり部活には顔を出せないかもしれない。だから、基本的には今までと同じように真中が部を仕切る。それでいいな？」

「は、はい。もちろんです。」

あ～あ、相當おえさせちゃつてるよ。

そりゃそうか、だつて一応理事だもんね。

そして、そのあと合宿のこととか、これから練習内容とか、大会のこととか話してそのあとはお開きになつた。

ミーティング終了後、鴻は秀から呼び出されたらしくってそのまま学校の方に向かい、真中先輩は憔悴しきっていたため、沖下先輩が介護しながら帰つて行つた。

そして、俺と京介は一緒に帰つた。

帰り道の途中。

「なんていきなり顧問なんてやるんだよ。」

そう言つたら、京介は俺のことをじつと見つめてきた。

「・・・僕のことが心配なんだ。」

「へ？」

「前に、女装せられそうだったって聞いたから。」

「げ、それを誰に？」

つて一人しかいないか。

「そんなことはほんとうだつていい。」

そういうと、京介は俺を抱きすくめる。

「俺以外のやつに、偉を好き勝手させんなんで、絶対許さない。」

な、そんな恥ずかしいこと、道の真ん中で言つくなよな。

俺は、赤くなつて目を開じると、

「偉、覚えてるか約束。」

「や、約束？」

京介は、俺の耳元に口を当てるとい

「試験が終わつたら……。」

あ。

「だから、早く帰ろ。」

俺は、そりて真つ赤になりながら京介に引っ張られていった。

だって、約束の内容を思い出してしまつたから。

act・26 本当の恋（前書き）

まず初めに、このように更新が遅くなつたこと、非常に申し訳ありませんでした。

今回は18禁に引っかかるないように話を作っていたため、非常に時間がかかってしまいました。

これからも、この話は続けていくので、どうか応援お願いいたします。

act・26 本当の恋

家に帰りつゝと、京介は俺の手を引いて、京介の部屋に入った。

いつも入ってる部屋なのに、今口はなんだかどうじても意識してしまう。

すぐ「こ、こ、こ、こ、こ、こ」と、京介の横顔がどうじても焦つてるように見えてしました。

その焦つてる表情を見た瞬間、俺はどうしてか、何ともやるせない感情に陥つた。

そして、同時にこのような行為にこのまま流れてしまつてもいいのか、とこう疑問がふと浮かんできた。

そんな俺の感情には気づかず、京介は俺をベットの方に押し倒してきました。

そして、有無を言わぬすに口を重ねてきた。

「……ん。」

そして、京介の手が俺のズボンにかかりました。

その時、俺は、どうしても耐えられなくなつて、京介の胸を押した。

京介はそのことでも驚いたようだ。

「偉？」

と、声をかけてくる。

その次の瞬間。

ピンポーン。

インターフォンが鳴った。

京介は無視しようとしたが、その後も何度も何度も鳴るために、仕方なく、玄関へと向かった。

そうして、俺は、一度立ち上がってから、またボフツヒベットに横になった。

あの時、咄嗟だつたけど、頭の中はいやにクリアーだった。

京介とそういうことをやることが嫌なんじゃない。

確かに、少し怖いとか、痛かっただらうじょひ、とかはある。

でも、京介のことは好きだし、そういうのは拒絶する理由なんかじやないと思つ。

大事なのは、京介が確かに焦っていたことだ。

その理由はわからないけど、俺は、もし京介とそういうことをするなら……。

と、その時、突然ドアが開いた。

そこにいたのは、

「景ー？」

そして、景はすぐ俺に近づいてくると、力いっぱい抱きしめてきた。

「「めん、兄さん。事情は全部母さんから聞き出した。」

あ……。

その後、落ち着いた表情で京介が入ってきた。

「兄さんがそんなことに巻き込まれてたってのに、僕は何もできていなかつた。本当に「めん、兄さん。」

「……景。」

景は少し泣いてるみたいだつた。

それだけ心配してくれてたつてことだよな……。

「それでね、兄さん。」

景はしつかり俺を見ると、

「父さんも説得した。もつ、兄さんがあそこに戻れない理由はない。

「これからは、絶対に僕が兄さんをする。だから、兄さん、一緒に帰るわ。」

え……。

それじゃあ。

俺は京介の方を見た。

京介はいつも通り、冷静な表情だった。

いや、普通に見たらそつかもしないけど、一瞬だけ、悲しそうな表情が見えた。

氣のせいかもしないけど、俺には確かに見えた気がしたんだ。

「……景。」

俺は決意した。

「俺は、帰れない。」

「どうして…？」

俺は、一呼吸おいてから、

「俺、京介と一緒にいたいから！」

そう、言い切った。

景はそのことに少し呆然としていたが、直後、京介の方をキッと睨み付け、ツカツカと京介の方に向かつていった。

その時、

「な、京介兄、鍵空いてたから、勝手に入ってきたやつだぞ。」

そういうて、玲介が顔を出した。

その瞬間、京介の目がキラリと光つて、

「ちよつといい、玲介、こいつを連れてけ。」

「は？ なんでそんなこと。それにこいつは俺のタイプじゃ……。」

「住居不法侵入。」

「は？」

「だから、こいつを連れてつたら、チャラにしてやる。」

「おいおい、かわいい弟にそんな無粋な真似を……。」

でも、京介の目は一切笑つていなかつた。

さすがに、玲介も自分の危険性を認識したのか、景を捕まえて肩に担いだ（玲介は軽く190cmを超える巨漢）

「これで、無かつたことにしろよ。」

「ああ、わかったよ。」

その間も景は「放せ~」とか言っていたが、有無を言わぬ連れて行かってしまった。

部屋には、また一人だけが残された。

「偉……。」

京介は俺の頭に手を乗せようとしたり、直前で手をひっこめ、俺の隣に座った。

そのまま、沈黙の時間が流れる。

でもこのままじゃいけない。

そう想いつて、意を決して聞いてみた。

「ねえ、京介。なんで、さつきあんなに余裕のない顔してたの?」

「…………心配だった。」

だいぶ時間を空けてから、京介はボソッと言った。

「お前が、学校で女装とかさせられそつだつたと聞いて、誰かに奪われると思った。それで、少しでも早く、俺のものにしてしまったかった。」

京介はゆっくつこりながら向いた。

「そんな焦った気持ちがお前を怖がらせてしまったんだよな。」

違う。そりゃないんだ。

それを伝えるために、俺は京介の頬をつかみ、自分から京介にキスをした。

京介はとても驚いていた。

「確かに、あの時の京介は怖かった。でも、そんなことより、京介とのせつかくの思い出が、あんな焦った気持ちで壊されることの方がもっと怖かつたんだ。」

俺は、今ある気持ちすべてを話した。

でも、言った瞬間、どうしても恥ずかしくなって、京介が正視できなくなつて、俺は思わずソッポを向いた。

と、その時隣でクスッと笑う声が。

「なんだよ、人が真剣に言つたの!」

「いや、悪い。そうだな、本当に偉の言つとおりだ。」

そこで、京介はまた真剣な眼差しになつた。

「でもな、いつも心配してゐるんだ。お前が俺の前からいなくなつてしまつんじやないかって。」

「俺だつて心配だよ。京介、かつここし、前にはお見合に写真だ

つて机に置いてあつたし、でもね……。」

俺は一回そこで言葉を切つてから、しつかりと京介の目を見据えて、「それでも、京介のことが一番好きだから。この気持ちだけは本物だから。」

俺は、そういった。

「僕……。」

そして、

「俺は独占欲が非常に強いぞ。それでもいいのか?」

「そんなの、前から知ってるけどじやん。」

「……そつだつたな。」

やつと京介が笑つた。

そう、俺はこの京介の笑顔が見たかつたんだ。

act・27 翌日の朝（前書き）

更新が不定期になつてること、本当に申し訳ありません。
それだけに、一話一話、力を込めて執筆しております。
何とか更新ペースを上げていきますので、今後ともよろしくお願い
いたします。
感想もいただければうれしい限りです。

「……ん、ふあ～。あれ？」

なんだかいつもの田覚めと違つ感じ……。

（あ、ここって京介の部屋じゃん。というか、ビルしてここで寝てるんだね？）

そこまで思考が回ったところで、突然に大体のことを見い出した。

ただし肝心なところを抜いて。

「う、うわ～。も、もしかして、俺、京介と……。」

そこにに関してだけはビルしても思い出せない。

とにかく、覚えてるのは京介の笑顔を見たあたりでほつとしたところまで。

一人で部屋の中であたふたしていると、

「朝から騒がしいぞ。」

そういうて、京介が部屋の中に入ってきた。

「あ、京介！」

俺は間髪入れずに聞いた。

「あ、あのさ、昨日もしかして……。」「

そういうと、京介は少し不機嫌そうな顔をした。

「またぐ、朝までぐずり起つてたやつなど」のびにしだか。「

「え？ あ、ああ。」

そこまで言われて、大体分かった。

「もしかして、俺って、京介の笑顔を見た後すぐに寝ちゃつたの？」

そう言つたら、京介は俺の頭をワシリと掴んだ。

「『『寝ひきつたの？』じゃない。そのおかげで俺はお前の寝顔を見ながら鬱々としてたんだぞ。』

ああ、それで朝から不機嫌だったのね。

「第一、そういうことがあつたらきっと服装が乱れてるか、裸でベッドで寝てるか、そんなもんだろう。」

「で、でもさ、京介、どうして俺を起さうとしたしなかったの？」

「お前は、前田に言つたことも忘れたのか？」

や、やっぱ、なんだかさつきより不機嫌になつてく……つて、え？

「前口つて？」

そこで京介は盛大にため息をついた。

「最初の思い出せやんとしたものにしたいって言つてただろ？
無理やり起こして続けて、最悪だったなんて言われたら、こいつも
最悪だからな。」

やつこいつと、京介はふいとやつぽを向いてしまった。

あ、なんだかかわいい。

なぐんて、少し思つてクスッと笑つたら

「何がおかしい？」

やばい、やつに加熱した。

このままじゃ、朝から狩られる。

「いや、あのわ、ほんとめんつて。」

俺は誠意をこめて謝つた。

でも、京介の怒りはそんなことじや消えなかつたよつだ。

「それじゃあ、僕は何をして償つてくれるんだ？」

「へ？」

「もちろん俺を一夜悶々とさせた代償として、何かしてくれるんだ
らへ。」

そういうて、京介はベットに寝ている俺にのしかかってきた。

や、やばい。ほんとに朝から狩られる。

何とかそれを阻止しようとするが、体格の違いか、まったく京介の
体を押しのけることができそうにない。

「なんだ? 悪いのか?」

京介は余裕綽々の顔でそういうった。

「な、そんなわけないだろ。」

「ふうん、それじゃあ、この手は?」

俺が京介を押しのけようとして出した手を指してそういうった。

「あ、これは、その、重いから。」

「ふうん、それなら。」

そういうて、京介は俺と自分の位置を逆転させた。

そのタイミングを見計らって逃げようとしたが、がつしつと抱きし
められていて逃げ出すことができなかつた。

「これなら、いいんだろ?」

確かに、これなら京介の重さを直に受けたことはないけど……。

むしろ恥ずかしさは倍増した感じだ。

耳元に京介の吐息がかかる。

「……や、もう京介放して。」

俺は、顔を真っ赤にしてそう訴えた。

「ん？ どうしたか？」

でも、京介はむしろそんな俺を楽しんでるみたいにそう言った。

（く、くわ～、ひなつたら。）

俺は意を決して、京介にキスを仕掛けた。

京介はそれに動じることなくキスを受けた。

（あ、あれ？ もうと動じるかと思つたんだけど。）

むしろ、さつきよりなんだか、京介が激しくなつてゐる気が……。

顔もなんだか紅潮してゐる気がする。

もしかして、

「京介、今、欲情してる？」

俺がそう聞いた直後、京介は盛大にため息をついた。

「普通、そういうこと聞くか？」

そういうと、京介は俺から離れた。

「まあ、今の一言が無かつたら、このまま襲つてたけどな。」

「な。」

京介は冗談か本気かわからない口調でそういった。

「まあ、お前のそういう初心なところも好きだがな。」

そう言って、京介は俺の額にキスをした。

「だから、何があつても他の奴を受け入れるんじゃないぞ。」

「あ、当たり前だろ。そんなに信用できないのかよ。」

「信用できないんじゃない、心配だから言つてるんだ。」

京介は俺の髪をなでた。

(ああ、そつか、誰だつて心配になるもんなんだ。たとえ、それが自信家な京介でも。)

「大丈夫、京介が思つてる以上に俺は京介が大好きだよ。」

思いつめつていつとして、そつぱつたら。

「お前つて、本当に……。」

京介は何かを堪えたような素振りをした後に、

「俺の方も、お前が思つてゐるよつ遙かにお前のことが好きなんだよ。

」

そう言つて、俺にキスをした。

その時の一人には、現在平日の朝で、学校始業の10分前だといつことはまったく頭になかった。

act・28 療祭への参加（前書き）

一身上の都合によつて、長期休載していた頃、誠に申し訳ありませんでした。

また、執筆を開始いたしましたので、どうぞ応援よろしくお願ひします。

結局、朝のことが原因で盛大に遅刻してしまった僕は、担任からしつつ酷く叱られた。

僕の心中には途中、

(「の学校の理事のくせして、京介のヤツ…。」)

と何度も浮かんできたことか。

しかし、京介の評判が悪くなることは僕にとっても好ましくないので、結局の所、素直に叱られ続ける僕であった。

そんなこんなで、あさのホームルームが終わつたころには、いつも元気な僕がそこにいることはなかつた。

「おこおこ、せつかく最高に楽な終業式の日に遅刻するなんてどうかしてるぜ。」

「うむわこな～ショーン、もうこれ以上小言は頭に入んないつての。」

「あ～、いつや完全にいかれてやがんな～。」

とか言つて、ショーンはにやにやしていた。

數あるに、誰かが怒られてんのもコイツから見れば、一種のお祭り騒ぎみたいなもんなんだろ?!

まあ、確かに、一応名門進学校と言われているせいが、この学校の生徒たちは基本的に素行はきちんとしている。

もちろん、遅刻者もいるにはいるのだが、その比率はかなり低いもので、下手に遅刻をすると、学校の外には一人だけ、なんて状況もざらり起きてしまうのだ。

そんな中、教室の戸を勢いよく開け、僕の所まで鴻がやつてきた。

「僕、遅刻つて一体ビデオしたんだよ。だつて家はあるの……。」

そこで、僕は鴻の口を塞いだ。

（バカ、鴻。一応あんまりみんなには知られたくないんだよ。）

そう小声で鴻に伝えると、鴻は頭に？マークを浮かべていたが、とりあえず、静かになった。

そこに、こきなりシュンが割り込んできた。

「ちよつどよかつた、二人とも聞いてくれよ。」

その瞬間、鴻はシュンに警戒の姿勢をとった。

いまだに鴻はシュンに対しては「こんな感じなのだ。

「まあまあ、そんなに強張んなつて。話つてのははさ、今度、寮で夏休み突入の寮祭やるんだけど、良かつたら、一人も来ないかつてことなんだよ。」

「え？ それって、寮生じゃなくても行けんのか？」

わざわざまで警戒はあたり解いて鴻が興味津々に聞き始めた。

「ああ……、まあ、その、大丈夫なんだ。」

なんだかしどりむどりに話すショーンに少し僕は不信感を抱いたが、鴻の方はすでに乗り気になっていた。

「やうなのか？ それじゃあ、せっかくだし行こ……。」

「ダメだよ。」

と、突然扉を開いて秀が言い放った。

「な、お前はストーカーかよ。」

「うん、鴻だけのね？」

氣のせいか、語尾にハートがついたような氣がしたのは僕もさうだけではなかつたようだ。

「氣色悪い。とゆーか、なんでダメなんだよ？」

「ダメなものはダメ。」

いつもなら、ここからさらに食つて掛かる鴻だが、今日はいつもと違つた。

「なあ、頼むよ秀。お願ひだからね。」

鴻はびりせひ無意識のようだが、上田使ひに秀にお願いをしたのだ。
さすがの秀もこの鴻の行動にまびっく（とまうか、うつ）して
いた。

「それじゃあね……。」

秀はシユンの方を見て、

「俺も行つてもいいかな?」

その田には有無を言わさないオーラが立ち上っていた。

シユンもそのオーラに氣圧されて渋々と、

「あ、ああ、大丈夫。」

と言つた。

そこで、シユンはつむぎに向き直つて、

「それじゃあ、僕もむちむち来るよな?」

と言われた。

せつめのシユンの態度は怪しかつたけど、せつかく楽しめるチャンスを逃す手はない。

「うん、俺も行くよ。」

そう言った後、シユンが密かにガツツポーズをしていたのを見たのは秀のみだった。

act・28 寮祭への参加（後書き）

久し振りの執筆に加えて、文体が少し変わってしまったかもしれません。

この文体は変だ、という点がありましたら、「ご一報ください」。

そして、改めて長期の休載大変申し訳ありませんでした。

act・29 会場での歓声

そして、寮祭♂田。

京介には、寮祭の「ことは知りません」と寮に来た（どうせ言つたら、反対されると思ったから）。

寮に着くと、玄関前でショーンが待っていた。

「遅一ぞ偉。」

「悪い、悪い。」

もちろん遅れた理由は京介を撒くためだ。

「まつたく、今日の主…。」

そこまで言つと、突然ショーンは口を噤んだ。

「ん、どうかしたか？」

「いや、なんでもねー。」

なんとなく怪しい雰囲気を出しあはいたが、偉自身、寮祭といつ浮かれた行事に気を取られたのか、あまり気にしてはいなかつた。

「それより、もうみんな準備できてんだぜ、早く行こぜ。」

そうして、寮に入ると、すぐに祭り気分は始まった。

寮にいるメンバーが基本的に体育会系のメンバーなのでかなり盛り上がった感じになっていた。

僕は先に着いていた秀と鴻とともに席に腰を下ろしていた。

「結構盛り上がつてんな～。」

「まあ、一応これから長い休みに入る前だしね。」

この寮祭の主催者のようなメンバーが、各種のミニゲームを開いている所から少し離れた場所で僕たちは談笑し合っていた。

当初は僕も鴻もそのゲームへの参加をしようとしていたのだが、如何せん、参加しているメンバーのその勢いには近寄りがたいものがあつたため、このように食べ物などを食べながらの談笑会になつていたのだった。

そのうち、

「悪い、ちょっとトイレ行ってくる。」

そういうて、鴻が席を立つた。

「一緒に行くよ。」

そういうて、秀もついて行つた。

一人残された僕はぼーっとゲーム開催の方を見ていると、唐突に

主催者と曰がつた。

そうして、彼は突然こう言い放った。

「さあ、それでは本田のメインイベント、腕相撲大会。優勝賞品はなんと、一年のアイドル、近江偉君で～す。」

「は？」

会場はすさまじい歓声に包まれたが、偉は一人?マークを頭の上に浮かべていた。

そんな中、偉はさつさと賞品席の方連れて行かれてしまった。

「ちょっと、シユン、どうこうことだよ。」

そう言い放つたが、シユンはこやかな顔で、体の正面で合掌をしていた。

(あ、あの野郎、こいつことだつたのかよ。)

しかし、すでに会場内では対戦が始まつてあり、そこかしこで、勝つた、負けただの声が飛び交つていた。

残念ながら、頼みの秀も鴻もまだ帰つてこない。

そういうじてこるつちに、大きな笛の音が鳴つた。

「そこまでー。優勝者は高橋健一ー。」

優勝者と呼ばれた、かなりの筋肉質の男がウォーッと雄叫びをあげていた。

(ちょ、これってどうなつちやうんだよー。)

と、突然玄関の方から大きな声で、「待った。」といふ声が響いた。会場にいた全員がそちらの方を注視したところ、そこには一人の長身のサングラスをかけた人がいた。

「その勝負、俺も参加させてもらひ。」

そういうて、その男は対戦場まで素早い動きで来た。

突然の乱入者に会場にいた全員はさうに沸き立つて、主催者も参加を許可した。

対戦はまさに一瞬のことだつた。

高橋と呼ばれた男は一瞬で敗れ、その男は僕の近くまでやってきた。

そして、突然僕を肩から横担ぎにするとい、

「それじゃあ、賞品はもうつていぐ。」

そういうて、大歓声の中、会場を後にした。

act・29 会場での歓声（後書き）

とても中途半端な回になってしまった、本当に申し訳ありません。

また、この話も、そろそろ終わりに近づいてきましたが、どうか最後までよろしくお願ひします。

act・30 無事救出

寮の扉がバタンと閉まつた後。

「あの、どなたか知りませんが……。」

「お前、それ本氣で言つてんのか?」

「へ?」

その直後、男はサングラスを外した。

「つて、京介!」

「お前、本当に気づいてなかつたんだな……。」

（だつて、あんまりにもらしくない格好してたから、わかんなかつたよ。）

とは言えず、結局、あはは、と笑うしかなかつた。

「それより、なんで京介がここに?」

「なんで、じゃねーだろ。」

京介は僕を肩から下ろし、そつ怒鳴つた。

「お前、一步間違えてみろ、本当に危なかつたんだからな。」

僕は、何も言わずに俯いてしまった。

京介は、少しした後。

「怒鳴つちまつて悪かつたな。」

「ううん。大丈夫。」

それから、しばらく沈黙が流れた。

「正直、お前が誰かに取られるんじゃないかつて本当に怖かつた。」

「え？」

そこには、いつもの勝気な京介ではなく、心細そうな表情を浮かべて立っていた。

「ここに着くまで、本当に気が済じやなかつた。一刻も早く着くことしか考えられなかつた。」

そして、そこまで言つてから、一息ついて、

「そんだけ、お前のことが好きなんだよ。」

そう、一気に言つた。

僕は一瞬驚いていたが、すぐに、

「俺も京介のこと好きだよ。助けに来てくれたのが京介だつてわか

つたとき、本当にうれしかった。来ててくれてありがとう。」

そう言った後、京介は意地悪い顔に戻って、

「でも、結局変装してる俺のことは、分からなかつたよな～？」

「あ、それは、その…………。」

そこから先を言いつ前に、偉は京介に抱きしめられていた。

「君のお説ぎはまだついてくれるんだろうな？」

「う……。」

そして、少し背伸びをして偉の方から京介にキスをしたのだった。

実は、次回で最終回です。

HAROKE (前書き)

最終話です。

今まで読んでくださった方々、本当にありがとうございました。

Hペローグ

「そういえばさー、なんで京介があの場所に来れたか結局聞けてないんだけど。」

家に戻った後、偉は最も気になっていたことを京介に聞いていた。

「ああ、あれか？」

そうして、京介は爽やかに微笑みながら、

「愛の力だ。」

偉は思わず、その場でガクツとなっていた。

（今時こんなこと言う人いるんだな。）

そうしてから気を取り直して、

「そうじゃなくってさ、本当はどうやって分かつたんだよ。」

そう偉が言つたら、京介は素早く偉を背中から抱きすくめて、

「なんだ？ 愛の力じゃダメなのか？」

なんて、偉の耳元で囁いた。

「ちよ、こつちは真剣に聞いてるんだから、ちゃんと答えるよ。」

そう言つと、京介は盛大にため息をつきながら、

「またく、そんなに気になるのか？」

言つと、偉はいかにも興味津々といった感じでうなずいた。

そうして京介は偉に向い合せになつて、偉に触れるだけのキスをした。

「な、京介！」

そういつた直後、京介は真剣な眼差しになつて、

「偉……。」

と言つた。

「なんだよ？」

「内緒だ。」

そう一言だけ言つた。

H.P.ローゲ（後書き）

最終話まで読んでくださって本当にありがとうございました。
執筆途中、まあいろいろありました。

長期休載にスランプ、文章がうまくまとまりず、読者様には本当に
ご迷惑のかけっぱなしでしたこと、心からお詫び申し上げます。
実は執筆中、こんな終わり方でいいのかなー、なんて思つてしまつ
たんですが、まあこういったのも有かなつて感じで終わらせてしまっ
ました。

とつあえず、この作品はこれにて終了となります、まだまだ執筆
は続けていこうと思つておりますので、今後ともよろしくお願ひし
ます。

最後になりましたが、この小説を読んでくださった方々すべての方
に、この場を借りて御礼申し上げます。
重ね重ねになりますが、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5259m/>

パパとの関係

2011年10月6日22時51分発行